

妊娠と出生前検査の経験に関する アンケート調査 2013

集計結果報告

2014 年 10 月

妊娠と出生前検査の経験に関する調査研究会
(妊娠研究会)

妊娠と出生前検査の経験に関するアンケート調査2013

集計結果報告

- 2013年度 明治学院大学社会学部付属研究所 一般研究プロジェクト

研究課題:「妊娠と出生前検査に関わる女性の経験と社会の対応についての研究——都内における質問紙調査」

- 平成25年度～平成27年度 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤(B)

研究課題:「医療技術の選択とジェンダー:妊娠と出生前検査の経験に関する調査」

平成25年度アンケート調査集計結果報告

研究課題番号:25283017 研究代表者:柘植あづみ

目 次

はじめに	3
調査概要	4
調査結果	11
直近の妊娠の経験	12
出生前検査についての経験	24
A 超音波検査に関する経験	27
B 母体血清マーカー検査に関する経験	40
C 羊水検査に関する経験	52
D その他の検査に関する経験	63
E 胎児の性別	66
F 妊娠・出産についての意見	69
結果のまとめ	73

研究助成について

この報告書のもとになった調査は、次の2つの研究助成によって実施したものである。ここに記して謝意を表する。

1) 医療機関調査

2013年度 明治学院大学社会学部付属研究所 一般研究プロジェクト

研究課題:「妊娠と出生前検査に関わる女性の経験と社会の対応についての研究
——都内における質問紙調査」

研究代表者 柘植あづみ

2) 保育園調査

平成25年度～平成27年度 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤(B)

研究課題:「医療技術の選択とジェンダー:妊娠と出生前検査の経験に関する調査」

研究課題番号:25283017

研究代表者 柘植あづみ

明治学院大学 社会学部付属研究所 プロジェクト 研究組織

平成25年度（2013年4月～2014年3月）

※所属・身分はH25年度時点（カッコ内は平成26年度）

研究代表者

柘植あづみ 明治学院大学社会学部 教授

研究分担者

菅野摂子 明治学院大学社会学部付属研究所 研究員

田中慶子 (公財)家計経済研究所 研究員

白井千晶 早稲田大学ほか非常勤講師(静岡大学人文社会科学部 准教授)

石黒眞里 明治学院大学社会学部 実習助手

科学研究費研究組織

平成25年度（2013年4月～2014年3月）

※所属・身分はH25年度時点（カッコ内は平成26年度）

研究代表者

柘植あづみ 明治学院大学社会学部 教授

研究分担者

菅野摂子 明治学院大学社会学部付属研究所 研究員
(電気通信大学女性研究者支援室 特任准教授)

田中慶子 (公財)家計経済研究所 次席研究員

研究協力者

石黒眞里 明治学院大学社会学部 実習助手
井原千琴 国立成育医療センター
白井千晶 早稲田大学ほか非常勤講師(静岡大学人文社会科学部 准教授)
二階堂祐子 明治学院大学大学院院生
渡部麻衣子 日本学術振興会・東京大学大学院情報学環
(東京大学大学院総合文化研究科 特任助教)

はじめに

妊娠経験は医療技術の進歩によって日々変化している。それは、女性が妊娠・出産すること、中絶すること、そして子どもをもつこと／もたないことの意識に、影響しているのではないか。そんな疑問から、女性の妊娠経験を知り、検討する必要があると考えた。妊娠はつねに出産に至るわけではない。流産、死産、人工妊娠中絶の経験についても知るために、「出産」ではなく「妊娠」に焦点をあてることにした。この調査のもうひとつの目的は、「出生前検査」が女性の妊娠経験にいかに関与しているかを知ることである。出生前検査とは胎児に疾患や障がいなどがあるかを調べる検査の総称である。ただ、胎児に重い疾患があるとわかって、出生前も出生後も治療は限られている。また、疾患や障がいの具体的な状態は、出産前には限定的にしかわからない。そんな中で、女性は、検査を受けるかどうか、検査結果を受けて妊娠を継続するか中絶するかという選択を迫られている。出生前検査をめぐる経験についての調査は多くない。そこで、出生前検査の経験を含めた妊娠の経験の詳細を知り、それらの課題を検討するために、2003年に「妊娠と出生前検査の経験についての調査」を実施した。それから10年を経て、出生前検査の技術は進展し続けている。そのために、2013年に、2003年調査と同様の質問を含むアンケート調査を実施した。本報告書では、2013年調査の集計結果を中心に報告する。

調査概要

調査の背景と目的

女性の妊娠と出生前検査については、医学的な手技やその成果についての論文や、胎児の疾患などの発見によって中絶することについての法的・倫理的な課題を指摘した論考は多くある。だが、女性がその経験をいかに受けとめているか、検査を受けるか/受けないか、妊娠を継続するかなど意思決定の過程とその要因を検討した研究が少ないこと、また検査を受けなかった人への調査がほとんどないことから、柘植・菅野・石黒は2003年に科学研究費補助金(課題番号14594023)の助成を受けて「妊娠と出生前検査についての調査」を東京都内で実施した。自記式郵送法アンケート900票を21保育園と4医療施設の協力を得て配布し、381票を回収した。有効回答は375票(有効回収率42.3%)を得た。続いて26名の女性へのインタビュー調査をした。その成果は、研究成果報告書(2005年)の他に、柘植・菅野・石黒『妊娠——あなたの妊娠と出生前検査の経験をおしえてください』洛北出版(2009年)として出版した。

2003年調査から10年を経て、出生前検査の諸技術はさらに進歩した。2013年の4月からは「新型出生前診断」またはNIPTと呼ばれる新しい検査の日本での臨床研究が始まった。そこで2013年時点の出生前検査をめぐる状況と、女性の妊娠をめぐる状況を把握し、2003年調査の結果と比較できる方法で、都内と神奈川県内でのアンケート調査を実施した。

調査方法

まず、明治学院大学社会学部付属研究所一般プロジェクトの助成を受けて、2013年4月～7月に都内および神奈川県の子婦人科医療機関と助産所にてアンケート用紙を配布した。その結果を参考にして、科学研究費の助成を受けて、2013年7月～9月に都内と神奈川県の保育園と子育て支援団体にてアンケート用紙を配布した。以下、前者を医療機関調査、後者を保育園調査と呼ぶ。

回収方法は、いずれの調査でもアンケート一式に、返信用封筒を同封し、無記名で郵送する方式をとったが、一部、協力施設の希望で、記入したアンケート用紙を封緘して、施設内の箱に投函し、後日、調査チームメンバーが回収する方法をとった。

回答者には、アンケートとは別に、回収時に希望者のみ薄謝(1000円のQUOカード)送付先が記載されたラベルを送付してもらった。アンケートの回答者が調査者に特定できないようにするために、事務担当者のみが、ラベルを取り扱い、謝品を送付した。

なお、調査に先立って、明治学院大学社会学部社会学科の調査・研究倫理審査委員会の審査を受け、承認されている。[承認番号SG13-001]

配布先と方法

・ 医療機関調査(全 7カ所)

産婦人科医院(診療所): 5カ所(東京都23区内: 3、神奈川県: 2)

助産所: 2カ所(いずれも神奈川県)

・ 保育園調査(全 14カ所)

私立保育園: 12カ所(東京都23区内: 7、東京都下: 3、神奈川県: 2)

子育て支援団体: 2カ所(東京都23区内: 1、神奈川県: 1)

※保育園調査で配布した私立保育園12カ所のうち、8カ所は2003年調査と同じ保育園である。

残りの4カ所は今回新たに追加した。

調査(1) 医療機関調査

(1)産婦人科医療機関+助産所＝以下、医療機関調査と呼ぶ

科学研究費での調査に先行して、明治学院大学社会学部附属研究所の一般プロジェクト研究費の助成を受けて実施した。

都内および神奈川県内の7ヶ所にて配布(2013年4月～7月)

本人の年齢、直近の妊娠年(年齢)などが無回答の場合は無効票とした。

配布数:241票

回収数:163票 (回収率 67.6%)

有効回答数:156票 (有効回収率 64.7%)

	配布数(票)	回収数(票)	回収率(%)	有効回答数(票)	有効回収率(%)
産婦人科医療機関+ 助産所	241 (内訳175+66)	163	67.6	156	64.7

調査(2) 保育園調査

(2)保育園+子育て支援団体＝以下、保育園調査と呼ぶ

科学研究費補助金にて実施した。

都内および神奈川県内の14ヶ所にて配布(2013年7月～9月)

保育園はいずれも私立保育園である。子育て支援団体とは、子育て支援のNPOと行政が支援している子育てサポートグループである。本人の年齢、直近の妊娠年(年齢)などが無回答の場合、直近の妊娠が2000年以前だった場合は無効票とした。

配布数:958票

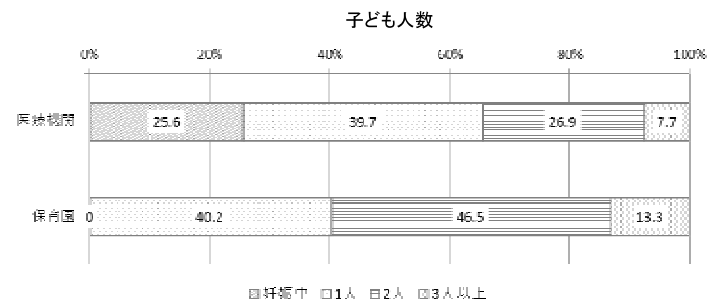
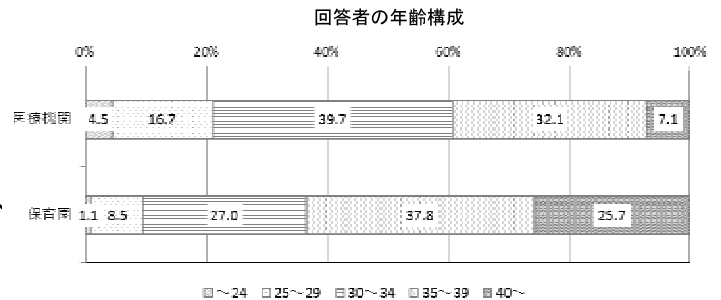
回収数:397票 (回収率 41.4%)

有効回答数:378票 (有効回収率 39.5%)

	配布数(票)	回収数(票)	回収率(%)	有効回答数(票)	有効回収率(%)
保育園+ 子育て支援団体	958 (内訳891+67)	397	41.4	378	39.5

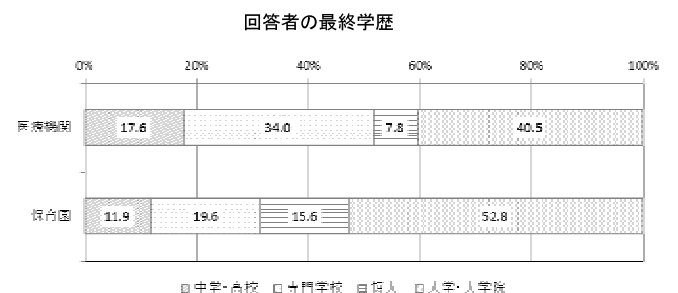
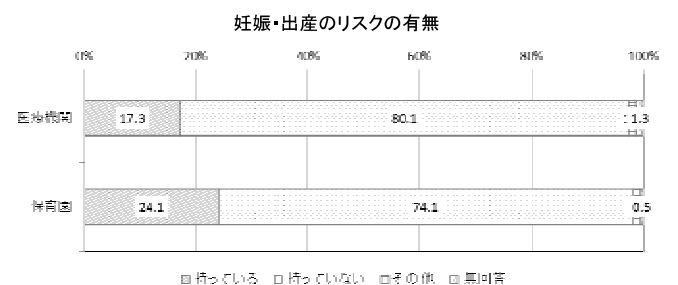
回答者のプロフィール(1)

- 医療機関調査の回答者は、平均33.2歳(範囲は23～47歳)。子どもの人数(n=116)は、0人(妊娠中を含む)25.6%、1人39.7%、2人26.9%、3人7.7%である。ただし、回答者のおよそ4分の1は、現在妊娠中で今回が初めての妊娠という人である。保育園調査は平均36.2歳(範囲は21～50歳)。子どもの人数は1人40.2%、2人46.5%、3人以上13.3%である。
- 回答者の妊娠経験については、医療機関調査は平均1.8回(範囲は1～4回)、直近での妊娠は平均32.2歳である。保育園調査は、平均2.13回(範囲は1回～7回)で、直近の妊娠は平均33.2歳である。
- 現在の配偶者の有無は、医療機関調査は、配偶者がいる人が98.1%、その他(離別や非婚など)が1.9%で、保育園調査では配偶者がいる人が95.8%、その他が4.3%であった。



回答者のプロフィール(2)

- 妊娠・出産や子育てに際し何らかの健康上の不安やリスクをお持ちですかという質問に対して、医療機関調査では「持っている」という人が17.3%、「持っていない」という人が80.1%、「その他」が1.3%であった。保育園調査では、「持っている」という人が24.1%、「持っていない」という人が74.1%、「その他」が0.5%であった。「持っている」という人は、自分自身の病気やこれまでの妊娠時に経験したリスク、子どもの障害など家族のことなどを挙げていた。
- 保育園調査の回答者の方が妊娠のリスクがあると回答した人がやや多かった。これには年齢差の影響もあると思われる。
- 最終学歴は、医療機関調査では中学・高校17.6%、専門学校34.0%、短期大学7.8%、大学・大学院40.5%であった。保育園調査では、中学・高校11.9%、専門学校19.6%、短期大学15.6%、大学・大学院52.8%であった。



回答者のプロフィール(3)

- 直近の妊娠中に仕事をしていた人は、医療機関調査では66.2%、していなかった人は33.8%である。保育園調査では、仕事をしていた人が85.4%、していなかった、その他が14.5%であった。
- 調査時点で、仕事をしている人は、医療機関調査では51.3%、していない人が48.7%である。保育園調査では、仕事をしている人は86.1%、していない、その他が13.9%である。
- 医療関連分野での就業経験がある人は、医療機関調査では25.3%(39名)で、そのうち68.4%が現在も医療関連分野に勤めている。保育園調査でも、17.0%(64名)で、そのうち73.4%が現在も勤めている。
- 妊娠・出産・中絶などに対して影響を与えた宗教・信仰・思想・信条は、医療機関調査では、「ある」という人が6.6%、「どちらともいえない」6.0%、「ない」86.8%、「その他」0.7%である。保育園調査では「ある」という人が4.3%「どちらともいえない」3.5%、「ない」92.3%、「その他」0%であった。

就業状況

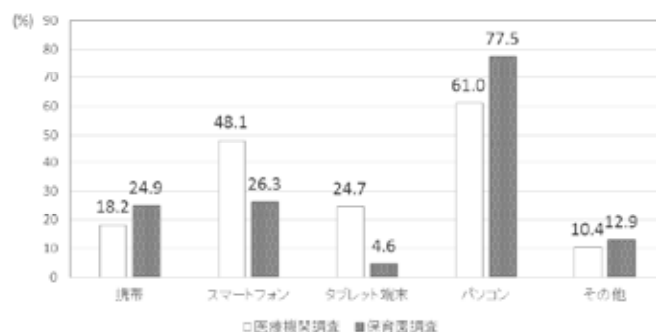
妊娠時	就業状況		
	仕事していた	仕事していない	その他
医療機関	66.2	33.8	
保育園	85.4	14.0	0.5

現在	就業状況		
	仕事している	仕事していない	その他
医療機関	51.3	48.7	
保育園	86.1	13.6	0.3

回答者のプロフィール(4)

- 妊娠・出産について情報検索に使った主なツールは、医療機関では、パソコンが最も多かった(61.0%)。スマートフォンが48.1%、タブレット端末が24.7%と続いており、携帯電話(18.2%)、その他(10.4%)は比較的少なかった。
- 保育園調査でも、パソコンが77.5%と最も多く、次いでスマートフォン26.3%、携帯電話24.9%、その他(雑誌や書籍、妊娠経験者などの回答)12.9%、タブレット端末4.6%であった。
- 直近で妊娠していた時期が、保育園調査では、4年以上前という方が多いため、現在とは、インターネットのアクセス方法に違いがあることに注意が必要である。とりわけ、スマートフォンやタブレット端末が広く普及したことの影響があるだろう。

情報検索ツール



本調査の結果の読み取りについての留意点(1)

2つの調査では、調査票の内容が若干異なる箇所がある。また、配布先の違いによって次のように回答者の特徴が異なる。

- 医療機関調査では、妊娠24週以降であれば現在妊娠中の方も対象としたため、出産経験のない方も含まれている。すべて診療所が対象であるため、出生前検査や出産は行っているが、病院とは異なる傾向がある(不安やリスクが高い人は、最初から病院に行っている等のセレクションバイアスがある)。また、検査を行っていない助産所も含まれている。
- 保育園調査では、配布先の保育園はすべて認可私立保育園である。原則として保育園児が1人以上いる女性が対象となるため、出産経験がある方が対象となっている。
- 配布・回収方法や調査時期もそれぞれ異なることを考慮したうえで、医療機関調査と保育園調査の結果の違いについて検討する。

本調査の結果の読み取りについての留意点(2)

- 本調査の調査票は、全体で12ページである。その中には回答形式が選択肢に加えて、質問内容に応じて様々な記述(自由回答)方式の質問がある。
- また、回答の傾向については、無回答が多い質問がある。これは、①答えたくない、②質問の内容がわからない、③調査票のデザインの問題、すなわちページ先頭や、前問でNOの場合(たとえば、検査を受検したかの質問で、受けていない場合)でも、指示はその続きの質問に回答が必要であるにもかかわらず、次のセクションまで飛ばしてしまっている、というケースが散見される。そのため、無回答数も図表に表記しているが、「無回答が多い」こと自体についても、(今後の課題であるが)注意深く検討していく。
- 回答数が4人以下のケースについては、原則として、実数・割合は表記しない。

調査結果

直近の妊娠の経験

調査では、まず、これまでの妊娠回数を尋ねた。一番最近の妊娠（以下では、「直近の妊娠」と表記）から、過去3回までの経験について、マトリックス方式で尋ねた。ここでは、直近の妊娠の結果のみを報告する。

妊娠の経験1 妊娠前の子どもの希望

「その妊娠がわかる前から、あなたは子どもが欲しかったですか」との質問に対し、「はい」「いいえ」「その他(具体的に)」で回答してもらった。

直近の妊娠について、医療機関調査では記入のあった154名のうち「はい」が93.5%であった。保育園調査では、記入のあった373名のうち「はい」が92.2%となっており、いずれも9割が、直近の妊娠がわかる前から、子どもが欲しかったと回答している。

「その他」の具体的な内容では、「すごく欲しかったわけではない」「どちらでもない」「自然に任せたかった」などの記述がみられた。

図1 医療機関 子どもの希望



n=154、ただし、無回答2を除く

図1 保育園 子どもの希望



n=373、ただし、無回答5を除く

妊娠の経験2 計画した時期の妊娠か

「計画していた時期に妊娠しましたか。」との質問に対し、「はい」「いいえ」「その他(具体的に)」で回答してもらった。

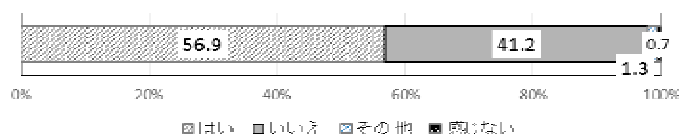
医療機関調査では、回答のあった153名のうち、「はい」56.9%、「いいえ」41.2%、その他2.0%であった。

保育園調査では、回答のあった368名のうち、「はい」57.3%、「いいえ」39.1%、その他3.5%であった。

「その他」の具体的な内容では、「あきらめていた時だった」「計画というほどのことはしていない」といった記述があった。また、「不妊治療中」という記述もあった。これは、はい・いいえでは回答できないことを伝えたかったと思われる。

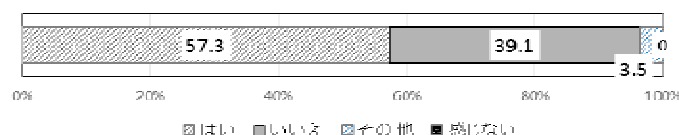
先の質問から子どもを希望していた人は9割を超えていたことがわかったので、直近の妊娠において「計画していた時期に妊娠した」と回答したのは、およそ半数となる。

図2 医療機関 計画した時期の妊娠



n=153、ただし、無回答3を除く

図2 保育園 計画した時期の妊娠



n=368、ただし、無回答10を除く

妊娠の経験3 診断前に妊娠だと感じた時

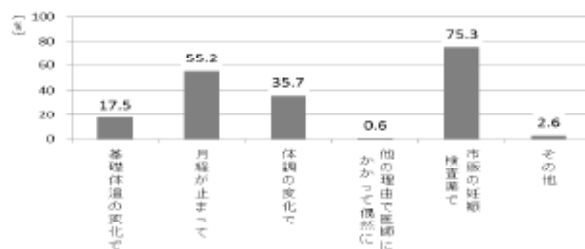
「医療機関で妊娠が診断される前に最初にご自身で妊娠していると感じたのは、どのような時ですか」との質問に回答を求め、6つの選択肢からあてはまるものをすべて選んでもらった（複数回答）。

医療機関調査、保育園調査ともに妊娠していると感じた時として、「市販の妊娠検査薬で」という回答が7割程度、次に「月経が止まって」が5割強、「体調の変化で」が3割強、「基礎体温の変化で」が2割弱となった。

「その他」の回答も数件あった。その内容は、「不妊治療中なので自分で感じる前に診断された」、「体外受精だったので」、「予感」などが挙がっていた。

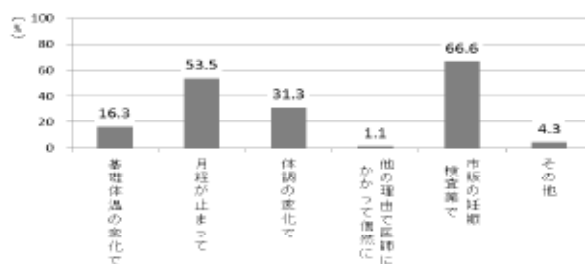
選択肢の組み合わせは、医療機関調査では、「検査薬」と「月経が止まって」と回答した人がもっとも多く22.1%、「検査薬」のみが14.9%、「検査薬」と「体調の変化」が11.7%だった。保育園調査でも、「検査薬」と「月経」とした人がもっとも多く19.3%、「検査薬」のみが17.6%、「月経が止まって」17.6%となった。

図3 医療機関 妊娠だと感じた時



n=153、ただし、無回答3を除く

図3 保育園 妊娠だと感じた時



n=374、ただし、無回答4を除く

妊娠の経験4 胎児の存在を感じた時

「あなたが胎児の存在を初めて感じた時を覚えていますか」という質問に対し、「はい」「いいえ」で回答してもらった。

医療機関調査では回答のあった150名のうち86.0%が直近の妊娠時に初めて胎児を感じた時を覚えていると回答した。

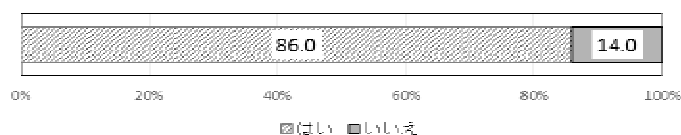
保育園調査では回答のあった358名のうち83.8%が初めて胎児を感じた時を覚えていると回答した。

いずれも胎児の存在を初めて感じた時を覚えている方が8割強にのぼった。

「はい」と回答した人に「具体的な時期やきっかけを教えてください」と尋ねたところ、医療機関調査120名、保育園調査では291名の記入があった。

妊娠初期から中期、後期では異なる経験が記述されていた。初期に超音波検査で胎芽を見たことやドップラーによる心音を聞いた経験、自身のつわりの経験、中期の胎動の経験、超音波で成長した胎児を見た経験など、多くの記述があった。

図4 医療機関 胎児の存在を感じた時



n=150、ただし、無回答6を除く

図4 保育園 胎児の存在を感じた時



n=358、ただし、無回答20を除く

妊娠の経験4 胎児の存在を感じた時 ①具体的な時期やきっかけ

胎児の存在を初めて感じたときを覚えていると答えた人に、その具体的な時期やきっかけなどを尋ねた。

- 自由記述による回答があったのは、医療機関調査では117名、保育園調査では289名であった。
- 回答をアフターコーディングしたところ、表1に示したように、何らかの検査を媒介として胎児の存在を感じた経験について述べた回答、妊婦の身体感覚から胎児の存在を感じた経験について述べた回答、胎児の存在を感じた際の環境について述べた回答、その他に分類できた。その他には、感じた時期について述べた回答、拳児の希望があったことを述べた回答、上の子どもとの関係性について述べた回答などが含まれる。とくに言及が多かったのは、検査では、超音波（エコー）で胎児の画像を見たこと、身体感覚では胎動であった。環境は検査によって感じたという回答は医療機関として数えた。その他、設問に「時期」という表現が含まれていたためか、「いつ」感じたかについての言及が多かった。

表1 医療機関/保育園 胎児の存在を感じた具体的なきっかけ

	回答数 (n)	自宅での検査	医療機関での検査・治療					身体感覚				環境要因		その他		
		妊娠検査薬	不妊治療	超音波ドップラー（心音）	超音波・エコー（画像）	写真	その他検査	妊婦の身体変化	胎動	つわり（初めてのつわりとは限らない）	雑（からだがつたっている、何となく感じたなど）	場所（医療施設）	場所（医療施設以外）	妊娠時期への言及	拳児の希望	関係性
医療機関調査	117	8	1	3	33	4	0	14	36	18	15	39	1	55	0	1
保育園調査	289	15	3	5	108	13	0	26	95	34	24	120	9	94	1	0

妊娠の経験5 妊娠に気づいた時の気持ち

「妊娠に気づいた時、あなたの気持ちを一言で表すと、どのような言葉が当てはまりますか」との質問に、8つの選択肢から、あてはまるものすべてを選んでもらった（複数回答）。

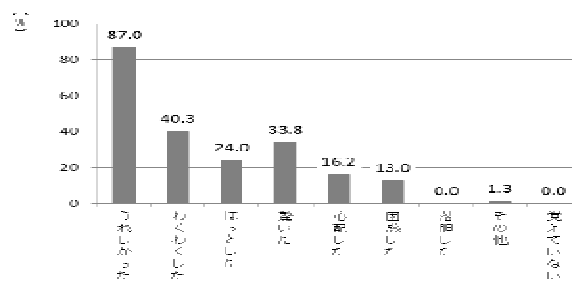
医療機関調査、保育園調査ともに、「うれしかった」に約8割があてはまると回答しており、「わくわくした」「驚いた」「ほっとした」と続いている。また、「心配した」が2割弱、「困惑した」が1割強あった。

「その他」の記述では、「考えていたとおりだった」「不思議だった」「どうしよう」などがあつた。

妊娠に気づいたときの気持ちを「覚えていない」と回答したのは1%以下で、ほとんどの人が妊娠に気づいた時の感情を覚えていた。

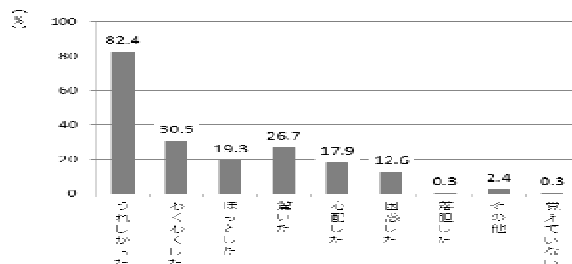
回答結果をみると、多くの項目において医療機関調査の方が比率が高くなっている。その理由として、医療機関調査の方が、妊娠中の人と初めての妊娠で回答している人が多いため、妊娠経験の新鮮さが影響していると予想される。

図5 医療機関 妊娠に気づいた時の気持ち（複数回答）



n=154、ただし、無回答2を除く

図5 保育園 妊娠に気づいた時の気持ち（複数回答）



n=374、ただし、無回答4を除く

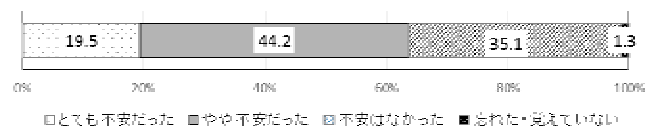
妊娠の経験6 自分の心身の状態の不安

「妊娠中のご自身の心身の状態について不安になったことがありますか」という質問に対し、「とても不安だった」「やや不安だった」「不安はなかった」「忘れた・覚えていない」の4つから選択してもらった。

医療機関調査では、「とても不安」19.5%、「やや不安」44.2%と、6割強が妊娠中の自分の心身の状態についての不安を感じている。

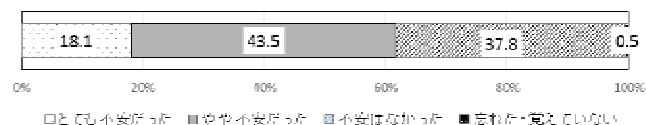
保育園調査でも、「とても不安」18.1%、「やや不安」43.5%となっており、約6割が自身の心身の状態についての不安を感じている。

図6 医療機関 自分の心身の状態の不安



n=154、ただし、無回答2を除く

図6 保育園 自分の心身の状態の不安



n=370、ただし、無回答8を除く

妊娠の経験6 自分の心身の状態の不安 ①具体的内容

「自身の心身の状態」に不安があると回答した人に、不安の具体的な内容について記述で回答してもらった。

- 医療機関調査では93名、保育園調査では240名から回答があった。
- 回答が寄せられた具体的内容は、大きく以下に分類された。
 - ①妊娠経過、②妊婦の生活環境、③障害、④胎児の生存、⑤震災・放射能、⑥医師との関係、⑦出産（出産時の異常、出産前後の体調、出産、婚姻関係含む）、⑧育児・出産後の生活、⑨その他・漠然とした不安、である。
- もっとも回答が多かったのは、⑧育児、出産後の生活に関することであり、医療機関調査では約30件、保育園調査では約100件の回答があった。具体的には「出産後に自分が子育てと仕事を両立していけるのか」、「弟か妹ができる事に上の子がうまく対応できるか。そして自分自身も」などといった記述だった。
- 次に多かったのは、①妊娠経過に関すること、医療機関調査で約45件、保育園調査で約80件の回答があった。具体的には「一度流産していたので」や「つわり、逆流性胃炎のような症状」などがみられた。
- さらに、⑦出産に関しては、医療機関調査では約30件、保育園調査で約80件あり、具体的には「無事に産まれてくれるかどうか」、あるいは「初めての分娩に耐えられるか」などが挙がっていた。

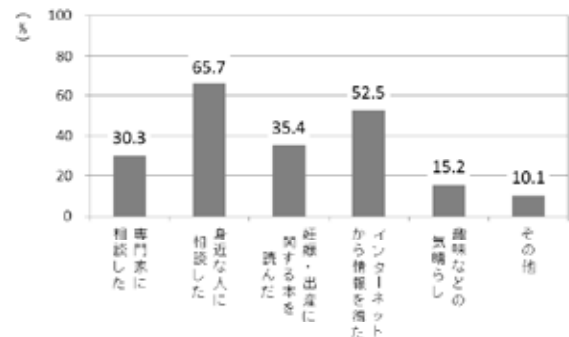
妊娠の経験6 自分の心身の状態の不安 ②不安への対処 【医療機関】

妊娠中の自身の心身の状態について不安になったことがあると回答した人に、「妊娠中のその不安について、どのように対処しましたか」と尋ね、6つの選択肢からあてはまるものすべてを選んでもらった(複数回答)。

医療機関調査では、不安への対処として「身近な人に相談をした」、「インターネットから情報を得た」、「妊娠・出産に関する本を読んだ」の順となっている。

医療機関調査では、およそ1年前の妊娠を回答している。近年のパソコンやスマートフォンの普及など、情報検索メディアの変化が、妊娠に関する情報検索にも影響があると思われる(妊娠の経験12も参照)。

図7 医療機関 心身の不安への対処(複数回答)



不安ありと回答したn=99、ただし、無回答3を除く

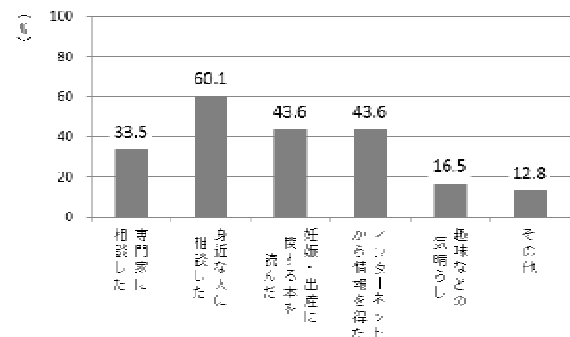
妊娠の経験6 自分の心身の状態の不安 ②不安への対処 【保育園】

妊娠中の自身の心身の状態について不安になったことがあると回答した人に、「妊娠中のその不安について、どのように対処しましたか」と尋ね、6つの選択肢からあてはまるものすべてを選んでもらった(複数回答)。

保育園調査では、「身近な人に相談した」、「妊娠・出産に関する本を読んだ」、「インターネットから情報を得た」の順となっている。

医療機関調査と保育園調査では、「インターネットから情報を得た」と「妊娠・出産に関する本を読んだ」の順番が逆転していた。医療機関調査では、平均して1年ほど前の妊娠を回答しているのに対して、保育園調査は平均して3年ほど前の妊娠を回答していることが影響しているのだろう。近年のパソコンやスマートフォンの普及など、情報検索メディアの変化が、妊娠に関する情報検索にも影響があると思われる(妊娠の経験12も参照)。

図7 保育園 心身の不安への対処(複数回答)



不安ありと回答したn=218、ただし、無回答10を除く

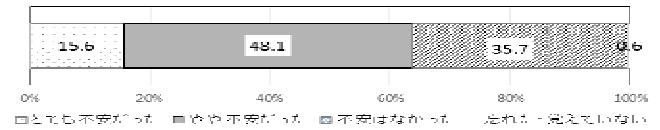
妊娠の経験7 胎児の状態の不安

「妊娠中の胎児の状態について不安になったことがありますか」という質問に対し、「とても不安だった」「やや不安だった」「不安はなかった」「忘れた・覚えていない」の4つから選択してもらった。

医療機関調査では、「とても不安」15.6%、「やや不安」48.1%と、あわせて6割強が胎児の状態についての不安を感じていた。

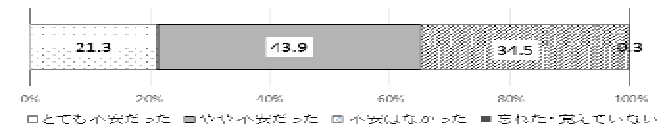
保育園調査でも、「とても不安」21.3%、「やや不安」43.9%となっており、同じく6割強が胎児の状態についての不安を感じていた。

図8 医療機関 胎児の状態の不安



n=154、ただし、無回答2を除く

図8 保育園 胎児の状態の不安



n=371、ただし、無回答7を除く

妊娠の経験7 胎児の状態の不安 ①具体的内容

「胎児の状態」に不安があると回答した人に、不安の具体的な内容について記述で回答してもらった。

- 医療機関調査では94名、保育園調査では232名から回答があった。
- 回答が寄せられた具体的内容は、妊娠の経験6と同様、大きく以下に分類された。
 - ①妊娠経過、②妊婦の生活環境、③障害、④胎児の生存、⑤震災・放射能、⑥医師との関係、⑦出産（出産時の異常、出産前後の体調、出産、婚姻関係含む）、⑧育児・出産後の生活、⑨その他・漠然とした不安、である。
- もっとも回答が多かったのは、①妊娠経過に関する内容で、医療機関調査は約40件、保育園調査は約110件の回答があった。その内容はたとえば「逆子が直るか」あるいは「出血し、切迫早産になった」などであった。
- 次に多かったのは、③障害に関する不安である。医療機関調査は約40件、保育園調査は約80件の回答があった。具体的には「障害を持って生まれたらどうしようかと考えた」や「五体満足かなあという心配はいつも思っていたように思う」などが挙げられる。
- そして、②妊婦の生活環境に関しても、医療機関調査は約15件、保育園調査は約20件の回答があった。その内容とは「安静といわれているのに仕事をしなくてはいけない状況」であったり、「持病があり、妊娠中薬を飲んでいた」などであった。

妊娠の経験7 胎児の状態の不安 ②不安への対処

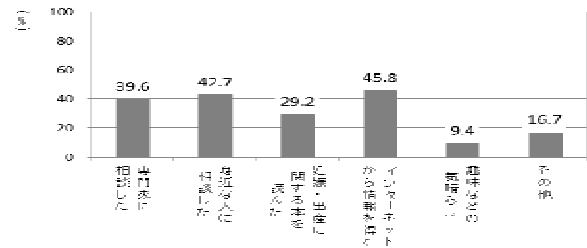
妊娠中の胎児の状態について不安になったことがあると回答した人に、「妊娠中のその不安について、どのように対処しましたか」と尋ね、6つの選択肢からあてはまるものをすべて選んでもらった(複数回答)。

医療機関調査では、「インターネットから情報を得た」と「身近な人に相談する」が4割強、「専門家に相談した」がそれに続き、「妊娠・出産の本を読む」が3割であった。

保育園調査では、「専門家に相談した」が5割弱とやや多く、次いで「身近な人に相談する」、「インターネットから情報を得た」、「妊娠・出産の本を読む」の順となっている。

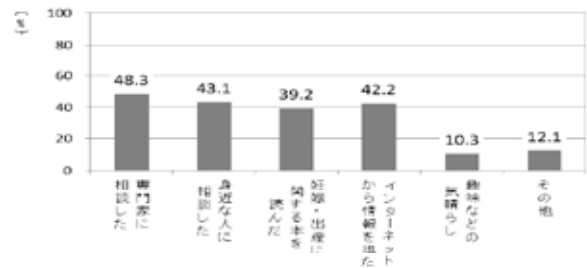
「専門家に相談した」の割合に差がみられるのは、保育園調査では医療者に限らず、保育園や子育て支援団体の保育士や看護師などの専門家も含まれているためだと考えられる。

図9 医療機関 胎児の不安への対処(複数回答)



不安ありと回答したn=96、ただし、無回答4を除く

図9 保育園 胎児の不安への対処(複数回答)



不安ありと回答したn=232、ただし、無回答10を除く

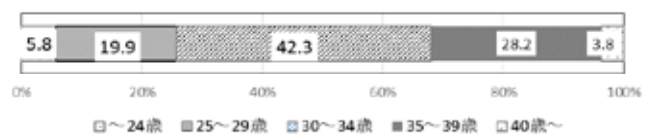
妊娠の経験8 妊娠時期・年齢

「妊娠していたのはいつですか」を尋ね、西暦年と年齢を回答してもらった。

医療機関調査では、2010～2012年の妊娠経験が75.6%、2013年16.0%と、この3年以内の経験が多い。また年齢は、30代前半が4割、30代後半が約3割となっている。

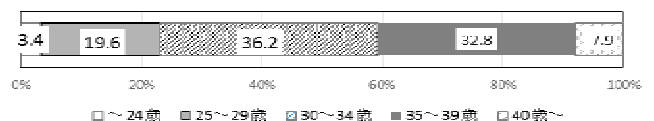
保育園調査では、2010～2012年の妊娠経験が59.0%、次に2005～2009年が36.5%となっている。年齢は、30代前半が4割弱、30代後半が3割強となっている。また、40代も1割近くになっており、全体として回答者には、いわゆる高齢出産であった人が一定数いたことが注目される。

図10 医療機関 妊娠時期(開始年齢)



n=154、ただし、無回答2を除く

図10 保育園 妊娠時期(開始年齢)



n=378

妊娠の経験9 妊娠の結果

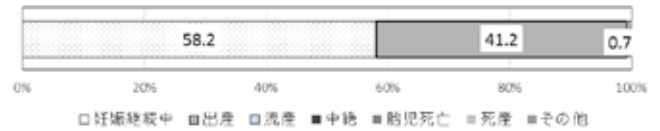
直近の妊娠について「その妊娠の結果について教えてください。」という質問に、7つの選択肢から1つ選択してもらった。

医療機関調査では、「妊娠継続中」が58.2%、「出産」が41.2%、「流産」0.7%であった。

保育園調査では、「出産」が94.6%と多く、「妊娠継続中」が2.2%、「流産」1.9%、「中絶」0.5%、「胎児死亡」0.8%となっていた。「死産」と「その他」の回答は、いずれもなかった。

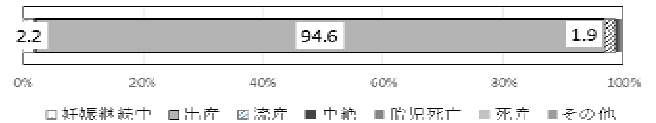
妊娠継続中の人には、妊娠週数も尋ねた。医療機関調査では、中期の方が4割、後期の方が5割となっている。保育園調査では、初期、中期、後期にほぼ等しく分かれた。

図11 医療機関 妊娠の結果



n=153、ただし、無回答3を除く

図11 保育園 妊娠の結果



n=367、ただし、無回答11を除く

妊娠経験10 妊娠経験をふりかえって（1）

妊娠経験や妊娠中の気持ちなどについて、自由記述方式で尋ねた。

- 医療機関調査の有効回答156名のうち101名に、保育園調査の有効回答378名のうち268名に記入があった。記述された内容は多岐にわたるが、妊娠中につらかったこと、不安だったこと、うれしかったこと、感謝したこと、幸せだったことなどが多く書かれていた。
- 医療機関調査では、不安・心配についての記入が30件以上、うれしさ・うれ(嬉)しい、幸せ・幸福、楽しい・楽しみ・楽しんだについての記入がそれぞれ20件以上あった。つらい(辛い)・つらさについての記入は10件以上、喜び、感謝はひと桁だった。悲しみ・かなしいという表現の回答はなかった。
- 保育園調査では、不安・心配についての記入が70件以上、うれしい(嬉しい)、幸せ・幸福がそれぞれ50件以上、楽しい・楽しみ・楽しんだ、つらい(辛い)・つらさについての記入がそれぞれ30件以上だった。喜びは20件以上、感謝、悲しみ・悲しいはそれぞれひと桁だった。ただし、この件数は、分類の枠組みを少し変えれば大きく変わる可能性がある(たとえば、「うれしさ、うれしい」と「幸せ・幸福」とをひとまとめにするなど)ため、記述の傾向を把握する参考に記載していることに留意されたい。また、これらの数値には、「つらくなかった」、「不安ではなかった」、「楽しめなかった」という全否定の表現は件数に含めなかった。「あまりつらくなかった」などの部分否定は含めた。

妊娠経験10 妊娠経験をふりかえって（2）

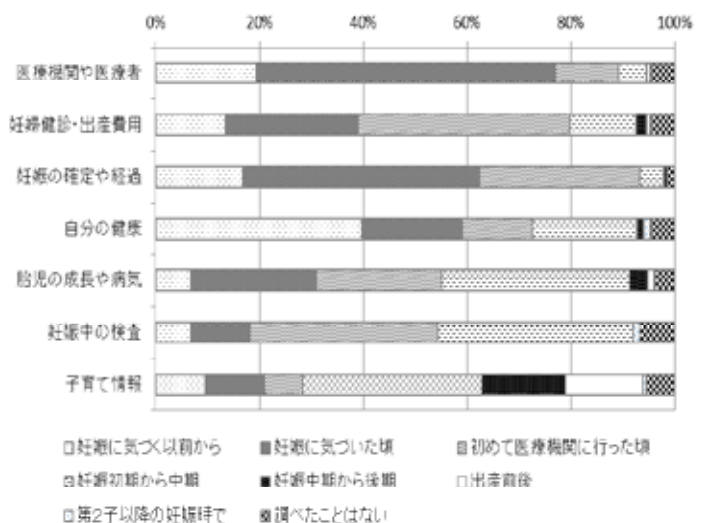
- 「不安・心配」については、妊娠中の体調、流産、胎児の状態、出産後の育児、仕事との両立、家族や同僚との関係などが多く記述されていた。
- 「うれしさ」については、妊娠したこと、出産したこと、不妊経験の後の妊娠、流産の後の妊娠の他に、夫がとても喜んだことや同僚が祝ってくれたことなども含まれていた。
- 「つらかった」ことについては、つわりがひどいときのつらさや、流産・早産の防止のための長期の入院と安静、不妊治療によるあせりなどの記述が少なくなかった。
- 身体的なこと以外に、仕事や人間関係など社会的・心理的なことに関する記述が多くみられた。さらに、妊娠中の女性に対する社会の配慮のなさ（たとえば、電車で席を譲ってもらえない、職場の環境など）を指摘する回答もあった。

妊娠経験11 妊娠について調べたこと【医療機関】

（直近の妊娠に限らず）「あなたは妊娠について、以下のようなことをいつ調べましたか」と尋ね、A.医療機関や医療者についての情報、B.妊婦健診や出産などの費用、C.妊娠の確定や経過、D.自分の健康、E.胎児の成長や病気、F.妊娠中に医療機関で行われる検査、G.産休や育休などの制度、育児支援、地域の子育て情報、H.その他、のそれぞれについて、いつ頃調べたのか、その時期を8つの選択肢から回答してもらった。

医療機関調査では、医療機関や医療者については、妊娠に気づいた頃に調べ、自分の健康については妊娠前から調べ、妊娠中の検査については妊娠初期～中期に調べ、子育て情報については妊娠中期以降に調べていた。

図12 医療機関 妊娠について調べたこと



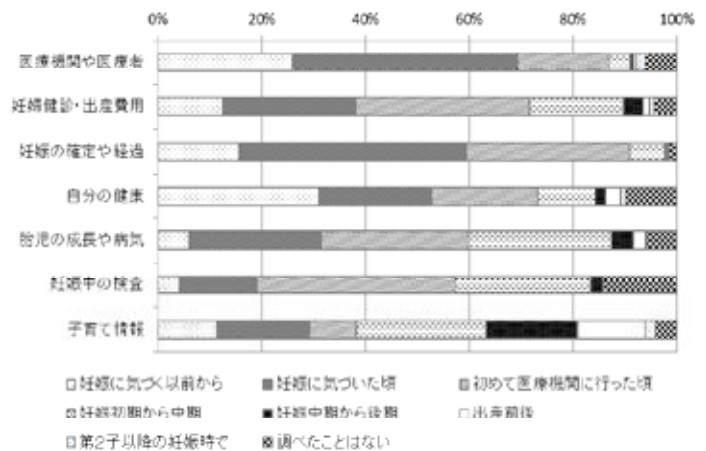
n=149（すべての項目に回答ありに限定）

妊娠経験11 妊娠について調べたこと【保育園】

(直近の妊娠に限らず)「あなたは妊娠について、以下のようなことをいつ調べましたか」と尋ね、A.医療機関や医療者についての情報、B.妊婦健診や出産などの費用、C.妊娠の確定や経過、D.自分の健康、E.胎児の成長や病気、F.妊娠中に医療機関で行われる検査、G.産休や育休などの制度、育児支援、地域の子育て情報、H.その他、のそれぞれについて、いつ頃調べたのか、その時期を8つの選択肢から回答してもらった。

保育園調査では、妊娠前に自分の健康について、医療機関や子育て情報を、妊娠に気づいた頃に医療機関の情報や妊娠の経過、胎児の成長について、医療機関受診時に検査のことや費用について調べているという傾向がみられる。

図12 保育園 妊娠について調べたこと



n=343(すべての項目に回答ありに限定)

妊娠経験12 妊娠についての情報収集ツール

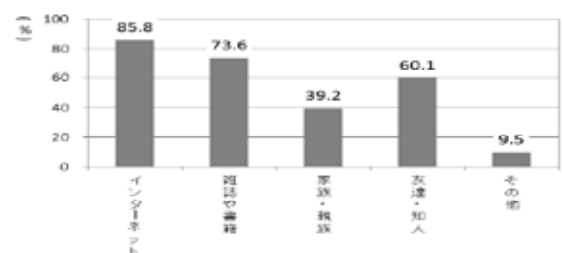
前問の妊娠に関する各種情報について、「どのように調べましたか」と質問し、「インターネット」「雑誌や書籍」「家族・親族」「友人・知人」「その他(具体的に)」から、あてはまるものすべてを選択してもらった(複数回答)。

医療機関調査で回答が多かったのは、インターネット(85.8%)、雑誌や書籍(73.6%)、友人・知人(60.1%)の順となっていた。

保育園調査でも、インターネット(80.4%)、雑誌や書籍(76.2%)、友人・知人(46.3%)の順となっていた。

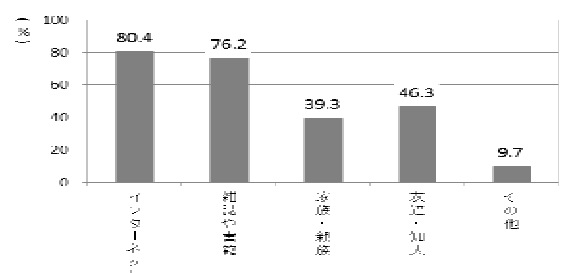
情報収集先として、友達・知人や家族・親族も選択されたが、それよりも、インターネット、雑誌や書籍が多く選択されており、重要な情報源となっていることがわかる。

図13 医療機関 情報収集ツール



n=148、ただし、無回答1を除く

図13 保育園 情報収集ツール



n=343、ただし、無回答2を除く

妊娠経験13 不妊治療について(1)

「あなたは妊娠を希望して不妊検査や治療を受けたことがありますか」と尋ね、「はい」「いいえ」で回答してもらった。

- 医療機関調査では、不妊検査や治療を受けたことがある(「はい」)という方が20名(13.5%)であった。そのうち通院期間について回答のあった18名について平均期間を算出すると、12.7ヵ月(範囲は1～52ヵ月)となった。
- 保育園調査では、不妊検査や治療を受けたことがある(「はい」)という方が77名(20.5%)であった。そのうち通院期間について回答のあった69名について平均期間を算出すると、18.7ヵ月(範囲は1ヵ月～12年)となった。

妊娠経験13 不妊治療について(2)

「差し支えなければ、どのような検査や治療をしたか簡単に教えてください」と尋ねた。

- 医療機関調査では、妻が不妊検査を受けたという記述が一番多く、10数件あった。他に多かったのはタイミング療法が約10件、夫の不妊検査が約10件、排卵誘発剤が約10件、人工授精と体外受精がそれぞれ10件未満、顕微授精もあった。
- 保育園調査では、妻が不妊検査を受けたという記述が一番多く、約50件あった。夫の検査は約30件だった。他に多かったのはタイミング療法が約40件、排卵誘発剤が約30件、ただし、人工授精、体外受精を受けていると記述しているが、排卵誘発剤の利用については記入していない人が少なくなかったため、実際にはもっと多いと思われる。人工授精と体外受精がそれぞれ約10件、顕微授精が数件あった。「不育症」も数件あった。
- 中には、「体外受精」とだけ書かれていて、それ以前に実施した検査や治療が記入されていない回答がいくつもあった。実際に、受けた検査や治療であっても記入されていないものがあると思われる。ここでの分析は記入されたものだけを対象としている。
- どちらの調査でも「ブライダルチェックの結果、不妊の原因が見つかった」という回答がわずかながらあった。
- 現在の年齢や妊娠時期に違いがあるが、現在、子どもがいる保育園調査でも全体の2割の方が何らかの検査や治療を受けた経験があるという結果であった。

出生前検査についての経験

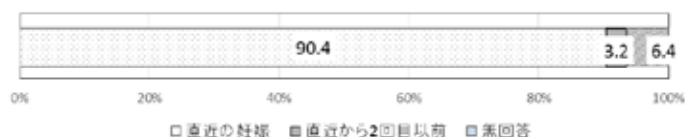
アンケート用紙では、これまでの妊娠経験(5回まで)を尋ね、出生前検査については、一番最近の妊娠、あるいは、それ以前の妊娠でも、妊娠の経験を詳しく記入できる場合は何度目の妊娠かを指定してもらったうえで、その妊娠経験での検査に関する経験を尋ねています。

出生前検査について回答した妊娠回について

出生前検査の経験については、原則として一番最近(直近)の妊娠の経験について回答してもらうこととした。ただし、直近の妊娠ではなく、それ以前の妊娠の方が、その妊娠の経験を詳しく記述できる場合は当該妊娠の経験を回答してもらうようにした(ただし、医療機関調査と保育園調査では質問の仕方がやや異なっている)。

出生前検査の回答に先立ち、どの妊娠回を回答するかを確認したところ、医療機関調査では、90.4%が直近の妊娠となったが、保育園調査では、73.8%であった。直近以前の妊娠回を選択する場合には、本人にとっての初めての妊娠経験の回を指定する者が多かった。

医療機関 出生前検査について回答した妊娠回



n=156

保育園 出生前検査について回答した妊娠回



n=378

出生前検査について回答した妊娠の時期

出生前検査の経験について回答してもらった妊娠回は、いつ頃であったのか、妊娠開始年を5年区分でみると、医療機関調査では、2010年～2012年が71.8%と多く、調査当年の2013年は13.5%となっており、2010年代の経験を回答した者が8割となっている。

保育園調査では、2010～2012年が44.2%、2005～2009年が34.7%と多い。2010年以前が約4割となっており、両調査では、出生前検査について回答している妊娠時期が異なっていることに注意が必要である。

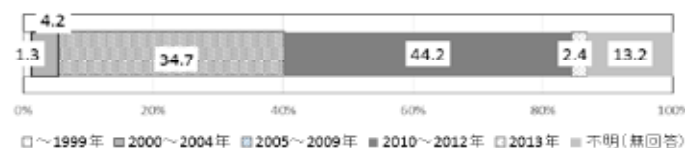
妊娠していた時期が前であるほど、妊婦が受けることが可能な出生前検査の種類も少なく、また検査の精度の違い(たとえば、超音波検査で確認できることの異常の種類)や、検査のガイドラインも異なっていることに留意が必要である。

医療機関 出生前検査について回答した妊娠の時期



n=156

保育園 出生前検査について回答した妊娠の時期



n=378

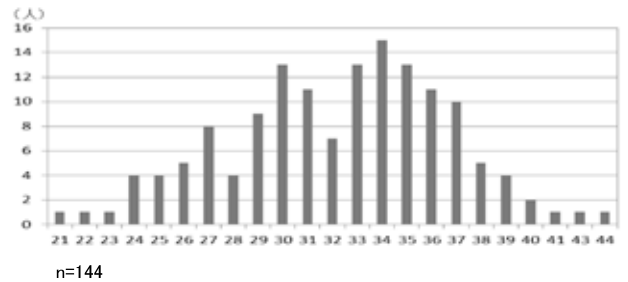
出生前検査について回答した妊娠時の年齢

出生前検査の経験について回答してもらう妊娠回の妊娠時年齢(妊娠開始時点の年齢)についてみると、平均は医療機関調査では、32.3歳(範囲21～44歳)、保育園調査では32.2歳(範囲18～43歳)であった。

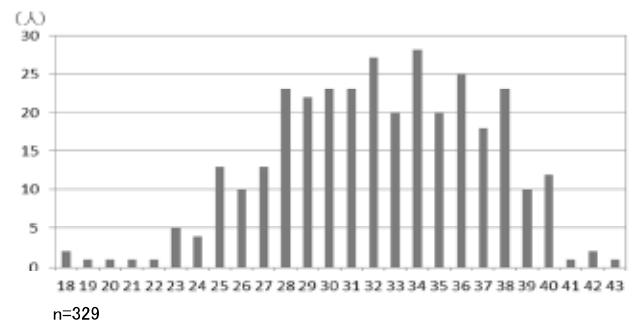
回答妊娠時に35歳以上だった人は、医療機関調査では33.3%、保育園調査では34.0%である。

妊娠時の年齢によって出生前検査の経験がどのように異なるか、詳細は今後の課題であるが、妊婦の年齢によって、検査について(詳細に)説明するかどうかなど、医療者の接し方も異なることが多く、結果をみていく際に注意が必要である。

医療機関 出生前検査について回答した妊娠時の年齢



保育園 出生前検査について回答した妊娠時の年齢



A 超音波検査に関する経験

超音波検査に関する質問の冒頭に、「妊娠中の超音波検査には、主に妊娠初期に膣から器具を挿入し胎児を確認する経膣超音波と、腹部の上から調べ、エコーといわれる経腹超音波の両方があります」と説明しています。

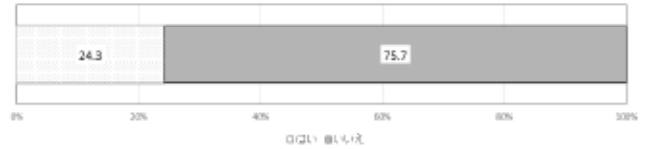
超音波検査1 医療施設に行く前に得ていた情報

「その妊娠で医療施設へ行く前に、超音波検査について何か情報を得ていましたか。」という質問に「はい」「いいえ」で回答してもらった。

医療機関調査では、記入のあった152名のうち、「はい」が37名(24.3%)、「いいえ」が115名(75.7%)で、その妊娠で医療施設へ行く前に超音波検査の情報を得ていない人の方が多いという結果であった。

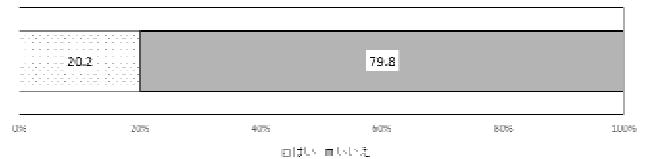
保育園調査では、記入のあった372名のうち、「はい」が75名(20.2%)、「いいえ」が297名(79.8%)で、その妊娠で医療施設へ行く前に超音波検査の情報を得ていない人の方が多いという結果であった。

図A-1 医療機関 超音波検査の事前情報入手



n=152、ただし、無回答4を除く

図A-1 保育園 超音波検査の事前情報入手



n=372、ただし、無回答6を除く

超音波検査1 医療施設に行く前に得ていた情報 ①具体的内容

医療施設に行く前に、超音波検査について何か情報を得ていたと回答した人に、どのような情報や内容を得ていたかを尋ねた。

- 医療機関調査では、記述があったのは29名で、そのうち、超音波検査で胎児の様子がわかる、胎児の障がいがあると具体的に記入があったのは7件で、「お腹の赤ちゃんがみえる」、「性別の確定。ダウン症の有無」といった記述があった。検査の方法について知っていたという記入も少なくなかった。
- 保育園調査では、記述があったのは61名で、検査の方法についての記入が多かった。そのほかに「胎児の状態(逆子など)」、「胎児の成長の確認」、「胎児の動きや大きさがわかる」、「胎児の異常がわかる」、といった記述があった。
- 両調査とも胎児の成長や発育についての言及が多くみられた。中には「成長を確認、形をみるから性別もわかる、首の後ろの部分で異常があるかみることができる」と、NT検査に関連すると思われる記述もあった。

超音波検査1 事前に得ていた情報 ②入手源

医療施設に行く前に、超音波検査について何か情報を得ていたと回答した人に、どのように情報や内容を得ていたかを尋ねた。

- 医療機関調査では、「それは誰からですか」という質問に対し、16名の回答があった。回答の内容を大きく分類すると、過去の妊娠時に医療者によって知らされた、友人や知人から聞いた、家族(母や姉)から聞いた、などに分けられる。
- 保育園調査では、「それは誰からですか」という質問に対し、38名の記述があり、うち30名が誰から情報を得たかを回答していた。医療機関と同じく大きく分類すると、過去の妊娠などの経験から医療者によって知らされた、友人や知人から聞いた、家族(母や姉、妹)から聞いた、自分自身または夫が医療職であるため知っている、に分けられる。
- いずれも、「誰から」と尋ねている質問にも関わらず、インターネットや、本・雑誌など手段についての記述があり、そこからだけということが強調してある記述もいくつかみられた。

超音波検査1 事前に得ていた情報 ③手段

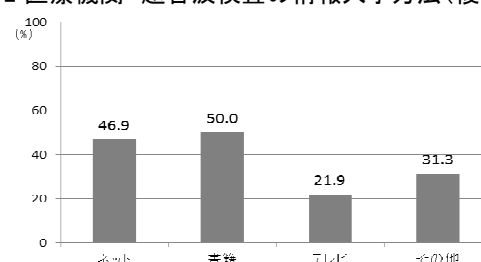
医療施設に行く前に、超音波検査について何か情報を得ていたと回答した人に、何から得たかを「インターネット」「雑誌・書籍」「テレビ」「その他(具体的に)」の選択肢からあてはまるものすべてに選択してもらった。

医療機関調査では、事前に情報を得ていたと回答した37名のうち、無回答の5名を除く32名から48件の回答があった。16件(50.0%)が「書籍」から情報を得たと回答し、ほぼ同じ15件(46.9%)が「インターネット」、「テレビ」7件(21.9%)、また「その他」は10件(31.3%)であった。

保育園調査では、事前に情報を得ていたと回答した76名のうち、無回答の1名を除く75名から87件の回答があった。42件(56.0%)が「書籍」から情報を得たと回答し、続いて「インターネット」19件(25.3%)、テレビ7件(9.3%)、また、「その他」は16件(21.3%)であった。

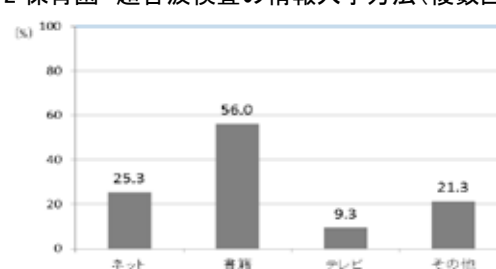
直近の妊娠時期が、保育園調査の方が前になるため、回答の前提となる、インターネットの利用状況や妊娠・育児雑誌の発行等、メディアの状況が両調査では異なり、注意が必要である。

図A-2 医療機関 超音波検査の情報入手方法(複数回答)



n=32(48件)、ただし問1ではいと回答した37のうち、無回答の5を除く

図A-2 保育園 超音波検査の情報入手方法(複数回答)



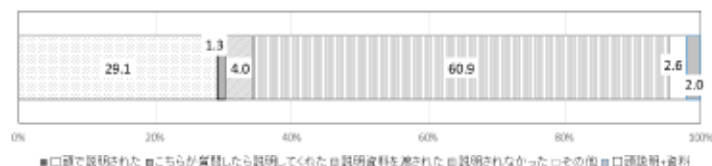
n=75(87件)、ただし問1ではいと回答した76のうち、無回答の1を除く

超音波検査2 医療者からの説明【医療機関】

「医療者から超音波検査の目的、方法、リスクなどを説明されましたか。」という質問に対し、「口頭で説明された」「こちらから質問したら説明してくれた」「説明資料を渡された」「説明されなかった」「その他」の中から1つ回答してもらった。

医療機関調査では、「説明されなかった」「口頭で説明された」が多い傾向であった。「説明されなかった」が最も多く92名(60.9%)、次に「口頭で説明された」が44名(29.1%)である。「説明資料を渡された」が6名(4.0%)、「こちらが質問したら説明してくれた」は数名だった。「その他」は「わからない」「覚えていない」、無回答などがそれぞれ数名であった。また「口頭で説明された」「説明資料を渡された」の両方を選択していた人もいた。

図A-3 医療機関 超音波検査の医療者からの説明



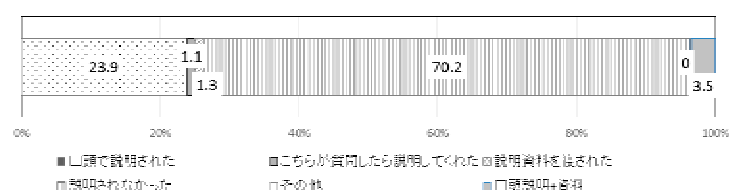
n=151、ただし無回答5を除く

超音波検査2 医療者からの説明【保育園】

「医療者から超音波検査の目的、方法、リスクなどを説明されましたか。」という質問に対し、「口頭で説明された」「こちらから質問したら説明してくれた」「説明資料を渡された」「説明されなかった」「その他」の中から1つ回答してもらった。

保育園調査では、記入のあった372名のうち、「説明されなかった」が261名(70.2%)と最も多かった。次に「口頭で説明された」が89名(23.9%)であった。「こちらが質問したら説明してくれた」「説明資料を渡された」はそれぞれ数名であった。「その他」は13名(3.5%)であり、その内容には、「わからない」「覚えていない」などが書かれていた。

図A-3 保育園 超音波検査の医療者からの説明



n=372、ただし無回答6を除く

超音波検査2 医療者からの説明 ①具体的内容

医療者から超音波検査の目的、方法、リスクなどについて、口頭や資料なども含め、何らかの説明を受けたと回答した人に、「それはどのような内容でしたか」と尋ねた。

- 医療機関調査では、記述のあった40名のうち、「忘れました」など具体的な記述のないものを除くと、29名に記述があった。内容が具体的に書かれたものの多くは「赤ちゃん(胎児)の様子を見る」といったものであるが、「胎児の奇形について調べる」など出生前検査であることに触れているものも少数ながらあった。「リスクはないと説明された」、「毎回しなくても良い」、という内容の記述も複数あった。
- 保育園調査では記述のあった65名は医療機関調査と同じ傾向であったが、「忘れました」「覚えていません」といった回答がさらに多く、具体的に内容の記述があった25名の中では「赤ちゃん(胎児)の様子を見る」といった内容が多い傾向がみられる。中には、「様々な病気がみつかった時、前もって知りたいですか」と、医療者から尋ねられたという記述もあった。

超音波検査2 医療者からの説明 ②評価とその理由

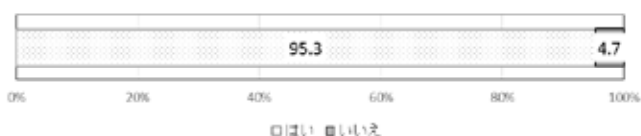
医療者から超音波検査の目的、方法、リスクなどについて、口頭や資料なども含め、何らかの説明を受けたと回答した人に、「その説明に満足しましたか」と尋ね、「はい」「いいえ」で回答してもらった。

医療機関調査では、説明を受けたと回答した55名のうち、無回答の12名を除く43名の回答があった。「はい」(満足した)が41名(95.3%)と、ほとんどであった。

保育園調査では、説明を受けたと回答した98名のうち、無回答の28名を除く70名の回答があった。「はい」(満足した)が69名(98.6%)と、ほとんどであった。

医療機関調査、保育園調査ともに、医療者から説明された人の多くは、その説明に満足したという回答であった。

図A-4 医療機関 超音波検査 医療者からの説明に満足



n=43、ただし問2で1～3および6と回答した55のうち、無回答の12を除く

図A-4 保育園 超音波検査 医療者からの説明に満足



n=70、ただし問2で1～3と回答した98のうち、無回答の28を除く

超音波検査3 医療者からの「検査を受けるかどうか」についての質問

「超音波検査を受けるかどうか、医療者からたずねられましたか。」という質問に対し、「はい」「いいえ」で回答してもらった。

医療機関調査では、記入のあった150名のうち、「いいえ」が121名(80.7%)と多く、「はい」は29名(19.3%)であった。

保育園調査では、記入のあった365名のうち、「いいえ」が344名(94.2%)と多く、「はい」は21名(5.8%)であった。

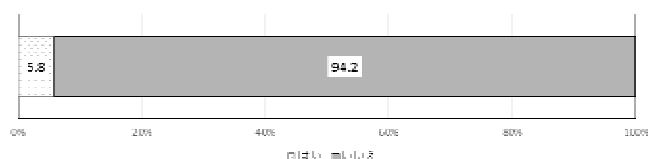
医療機関調査、保育園調査ともに、超音波検査を受けるかどうか医療者から尋ねられていない人の方が多い結果となった。

図A-5 医療機関 超音波検査について医療者からの質問



n=150、ただし、無回答6を除く

図A-5 保育園 超音波検査について医療者からの質問



n=365、ただし、無回答13を除く

超音波検査3 医療者からの「検査を受けるかどうか」についての質問 ①時期

超音波検査を受けるかどうか、医療者から「尋ねられた」と回答した人に、「それはいつ頃のことですか。」と尋ねた。回答は、妊娠何週頃、または、具体的に記入してもらった。

- 医療機関調査では医療者から超音波検査を受けるかどうか、「尋ねられた」と回答した29名のうち、具体的に妊娠週数が書かれた回答は26名で、4週～12週という範囲であった。ただ、「よく覚えていない」や、「初期」、「初診時」と書かれた回答も少数あった。
- 保育園調査では医療者から超音波検査を受けるかどうか、「尋ねられた」と回答した21名のうち、無回答が13名あり、具体的に妊娠週数が書かれた回答は8名で、4～12週という範囲であった。
- 医療機関調査と保育園調査ともに、超音波検査を受けるか医療者から尋ねられた時期を覚えている人は、みな妊娠初期に尋ねられたと答えていた。

超音波検査4 検査を受けましたか

「超音波検査を受けましたか。」という質問に、「はい」「いいえ」で回答してもらった。

医療機関調査では、記入のあった153名のうち、「はい」が152名(99.3%)と多かった。

保育園調査では、記入のあった367名のうち、「はい」が365名(99.5%)と多かった。

医療機関調査と保育園調査ともに、超音波検査を受けている人が大多数であった。

図A-6 医療機関 超音波検査 検査を受けましたか



n=153、ただし、無回答3をのぞく

図A-6 保育園 超音波検査 検査を受けましたか



n=367、ただし、無回答11をのぞく

超音波検査4 ①検査を受けた頻度

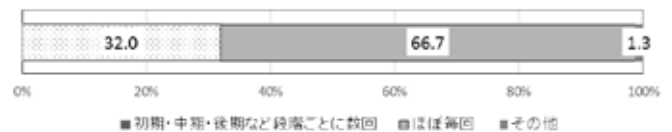
超音波検査を受けましたかという質問で「はい」と回答した人に、「どの程度受けましたか」と尋ねた。選択肢は「初期・中期・後期など段階ごとに数回」「ほぼ毎回」「その他(具体的に)」の3つである。

医療機関調査では、超音波検査を受けたと回答した人のうち、記入があった150名において、「ほぼ毎回」が100名(66.7%)、「初期・中期・後期など段階ごとに数回」が48名(32.0%)であった。「その他」はわずかだった。

保育園調査では、超音波検査を受けたと回答した人のうち、記入のあった356名において、「ほぼ毎回」が228名(64.0%)、「初期・中期・後期など段階ごとに数回」が124名(34.8%)であった。「その他」はわずかだった。

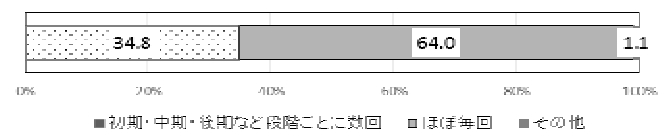
医療機関調査と保育園調査ともに、「ほぼ毎回」の回答が半数を超えており、超音波検査を受ける頻度は高いことが確認できた。

図A-7 医療機関 超音波検査 受検の頻度



n=150(超音波検査を受検したと回答した152から無回答2をのぞく)

図A-7 保育園 超音波検査 受検の頻度



n=356(超音波検査を受検したと回答した365から無回答9をのぞく)

超音波検査5 受ける／受けない理由

「超音波検査を受ける理由または受けない理由を教えてください」と記述で回答してもらった。

- 回答者のほとんどが超音波検査を受けていたため、「受ける理由」についての記述がほとんどだった。
- 医療機関調査では、超音波検査を受けた154名のうち137名がその理由を書いており、「胎児の様子を確認する必要があると感じていたから」「胎児の成長を調べるため」など胎児の様子を知りたい、順調に成長しているかを確認したい、という気持ちから検査を受けたことが多く記入されていた。「無事成長している姿を見たい。実感したかった為」、「目で見て赤ちゃんの元気な様子を確認してみたい」など、自分の目で胎児を見ることに意味を見出す人たちもいた。一方で、「受けるのが当たり前と思っていたから」など、超音波検査を受けることが当然だとする意見も多くあった。この他に、「もともと内膜症などの子宮トラブルがあったので」など、自分の身体の状態を知るためにも必要だと思っている人たちもいた。
- 保育園調査では、検査を受けた368名のうち338名がその理由を書いており、「受けるものだと思っていた」など検査を受けることが当たり前だとする意見が多く、その次に「そうするものだと思いこんでいたから、他に胎児の状況が分かる方法があると思えなかったから」、「胎児の健康状態などがわかるから」など、胎児の状態を知りたいとする意見が続いた。「胎児にも自分にもリスクがほとんどない検査で状態把握できると思っていたから」など、リスクや危険性がないことに言及している人もいた。「胎児の成長、異常がすぐに分かるので受けた。(100%ではないが)」など、胎児が異常だった場合に発見できることについて書かれているものもあった。
- 受けなかった理由としては、超音波検査、エコーなどの用語がわからないという内容を除くと、受けなかった理由が記入された回答はみられなかった。

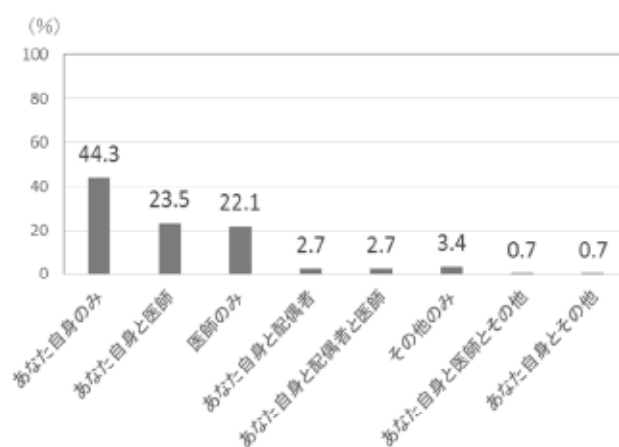
超音波検査6 受けるか受けないかを誰が決めたか【医療機関】

「超音波検査を受けるか受けないかを誰が決めましたか」と尋ね、「あなた自身」「配偶者」「医師」「その他(具体的に)」の選択肢から、あてはまるものすべてに選択してもらった。

回答の組み合わせをみると、医療機関調査では、記入のあった149名のうち、67名(44.3%)が「あなた自身」のみが決めたと回答し、続いて「あなた自身」と「医師」が35名(23.5%)、「医師のみ」が33名(22.1%)であった。また、「あなた自身」と「配偶者」、「あなた自身」と「配偶者」と「医師」はともに数名で、「あなた自身」と「医師」と「その他」、「あなた自身」と「その他」はいずれもわずかながらあった。「その他」のみは6名(3.4%)であった。

超音波検査を受けることは「あなた自身」が決めたという回答が4割以上を占めた。その他に「あなた自身と医師」、「医師のみ」という回答も2割以上あった。

図A-8 医療機関 超音波検査 受検の決定者



n=149、ただし、無記入3をのぞく

超音波検査6 受けるか受けないかを誰が決めたか【保育園】

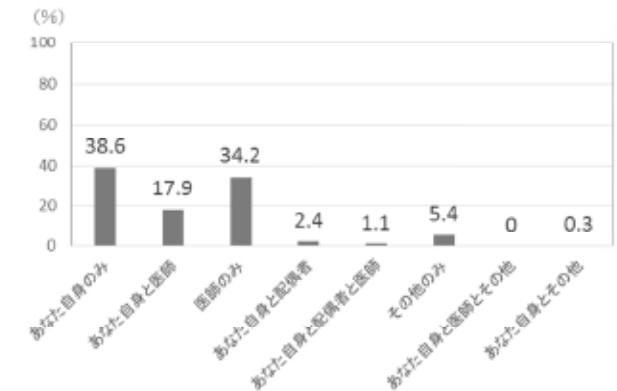
「超音波検査を受けるか受けないかを誰が決めましたか」と尋ね、「あなた自身」「配偶者」「医師」「その他（具体的に）」の選択肢から、あてはまるものすべてに選択してもらった。

回答の組み合わせをみると、保育園調査では、記入のあった368名のうち、142名（38.6%）が「あなた自身」のみが決めたと回答し、続いて「医師のみ」が126名（34.2%）、「あなた自身」と「医師」が66名（17.9%）、「その他」のみは20名（5.4%）、「あなた自身」と「配偶者」が9名（2.4%）、「あなた自身」と「配偶者」と「医師」が数名、「あなた自身」と「その他」「配偶者」のみがわずかながらあった。

誰が決めたかは「あなた自身」が決めたという回答が約4割、「医師」のみが3割以上あった。「あなた自身と医師」は、2割弱あった。

医療機関と保育園の結果を比較すると、いずれも「あなた自身のみ」が最も多いのは同じだが、医療機関では、「あなた自身と医師」「医師のみ」がほぼ同じ割合だったのに対して、保育園では、「医師のみ」が「あなた自身と医師」よりも、かなり多かった。

図A-8 保育園 超音波検査 受検の決定者



n=368、ただし、無記入10をのぞく

超音波検査7 異常の発見

「超音波検査によって何らかの異常が発見されましたか」という質問に、「はい」「いいえ」で回答してもらった。ただし、ここでは何を異常とするかについては回答者の判断に任せた。

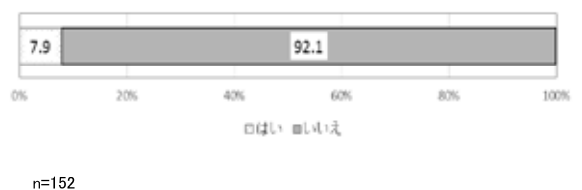
医療機関調査では、超音波検査を受検したと回答した152名のうち、「はい」は12名（7.9%）、「いいえ」が140名（92.1%）であった。

保育園調査では、超音波検査を受検したと回答した365名のうち記入があった361名において、「はい」は48名（13.3%）、「いいえ」が313名（86.7%）であった。

医療機関調査と保育園調査ともに、超音波検査を受検した人のうち、「何らかの異常が発見されましたか」という質問に「いいえ」と答えた人が多い結果となった。

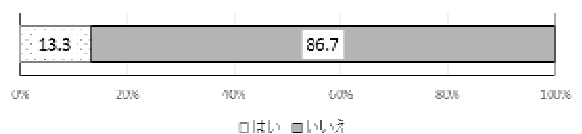
何らかの異常の発見を経験している割合が両調査で差があるが、医療機関調査では対象者の約1/4が妊娠中のため異常が発見されることが、保育園調査の対象者よりも少ないのではないと思われる。また、保育園調査の回答者の方が平均の妊娠回数が多く、その中から、出生前検査についての印象が強い妊娠回を選択して、当該経験として記述していることなどの影響が推測される。

図A-9 医療機関 超音波検査 異常の発見



n=152

図A-9 保育園 超音波検査 異常の発見



n=361（超音波検査を受検した365から無記入4をのぞく）

超音波検査7 ①何らかの異常の内容と②対応

超音波検査で何らかの異常が発見されたと回答した人に、「それはどのような異常でしたか」そして「その後、どのように対応しましたか」と質問し、それぞれ記述で回答してもらった。

- 医療機関調査では、超音波検査を受けて何らかの異常があったと回答した12名全員に異常の内容の記述があり、逆子や子宮内の出血などを指摘されていた。「初期(5週)胎嚢(たいのう)内に胎芽(たいが)が発育がない(7週)。心拍が見えない」と病院で言われ、「9週で確認できるまで、祈って待つ」と対応したと記述されたものもあった。また、子宮内に出血の跡があると指摘され、「動きすぎを注意され仕事を退職した」という人もいた。
- 保育園調査では、超音波検査を受けて何らかの異常があったと回答した48名のうち、異常の内容について記述があったのは44名であった。その内容は、逆子、前置(ぜんち)・低置(ていち)胎盤、胎児の大きさ、羊水量などで、その多くは逆子体操をしたり経過を観察した、という記述であったが、中には「36週のとき、子どもがあと24時間しか生きられないとわかり、すぐ救急車に大きな病院へ移動し、緊急帝王切開で摘出1420g」、「胎児の心臓が動いていないことが発覚した。流産の処置」という記述もあった。「四肢短縮」、「CPC(脈絡叢嚢胞・みゃくらくそうのうほう)の疑い」、「背骨の隙間」などを指摘された人もいたが、これらの人々は「経過を観察」して対応していた。

超音波検査8 結果を知らせた相手

「検査結果を誰に知らせましたか」と尋ね、「配偶者」「自分の親(親と表記)」「配偶者の親(義親と表記)」「その他(具体的に)」「誰にも知らせていない」の選択肢からあてはまるものすべてに選択してもらった。ここでは、選択肢ごとの回答状況を確認していく。

右表は、各選択肢の回答状況を組み合わせて表示している。

医療機関調査では、記入のあった144名のうち、142名(98.6%)が「配偶者」に知らせたと回答し、続いて「自分の親」が95名(66.0%)、「配偶者の親」が60名(41.7%)、「その他」が21名(14.6%)、「誰にも知らせていない」がわずかにあった。

保育園調査では、記入のあった356名のうち、343名(96.3%)が「配偶者」に知らせたと回答し、続いて「自分の親」が238名(66.9%)、「配偶者の親」が139(39.0%)、「その他」が29名(8.1%)、「誰にも知らせていない」が9名(2.5%)であった。

(親・義親が存命かを問うていないため注意が必要であるが)超音波検査の結果は、配偶者のみならず、自分の親や配偶者の親にも知らせており、保育園調査の方がその傾向が強い。一方で、保育園調査では、「誰にも知らせていない」という人がやや多くなっている。なぜ、誰にも知らせていないのか、さらに検討していく。

表A-1 超音波検査 結果を知らせた相手

	(%)	
	医療機関調査	保育園調査
配偶者のみ	30.1	27.8
配偶者・親	23.3	26.7
配偶者・義親	1.4	1.4
配偶者・その他	1.4	—
配偶者・親・義親	28.8	32.6
配偶者・義親・その他	—	—
配偶者・親・その他	3.4	2.0
配偶者・親・義親・その他	9.6	4.8
誰にも知らせていない	—	2.5
その他	0	—
親・義親	—	0
親	0	—

医療機関調査 n=144(超音波検査を受検した154のうち、無回答10をのぞく)

保育園調査 n=356(超音波検査を受検した368のうち、無回答の12をのぞく)

超音波検査9 検査についての気持ちや考え【医療機関】

「超音波検査について、気にかかったことや、あなたのお気持ちやお考えを聞かせてください」という質問し、記述で回答してもらった。

- 医療機関調査では、多くが「受けて良かった」といったプラスの評価であった。「胎児を見る事が出来て妊娠中の不安が(元気かな?など)少しでも解消できる。”赤ちゃんに会える”っていう感覚」など、胎児を画像を通して見ることの喜びなどが述べられていた。
- マイナスの評価としては、「案外、あっさりとしていて、もう少し説明してほしかった。2D写真の画質が悪い」「経膣だと細菌感染のリスクがあると知り、医療を提供する側からの説明が欲しかった」など、画像の見方や安全性について医師への説明を求めるもの、「どきどきした。何か見つかるか、どうか不安」「異常が見つかったら、以降妊娠生活を楽しめていたか分からない」など胎児の異常についての不安などがあつた。
- 「毎回経膣超音波や経腹超音波があつたが、胎児、母体を心配して…というより、『お金もうけの為』の検査と感じた。助産院にかかっていた時はほとんど超音波はなかった。受けなくても良いものなら、それを説明して、妊婦本人に選択するようにさせて欲しい」など費用に関連した説明を求めるものもあつた。

超音波検査9 検査についての気持ちや考え【保育園】

「超音波検査について、気にかかったことや、あなたのお気持ちやお考えを聞かせてください」という質問し、記述で回答してもらった。

- 保育園調査でも、同様にプラスの評価が多くあつた。「安心する」「楽しみ」「嬉しかった」など、妊婦健診の中では、超音波検査を期待する気持ちについての記述が多かった。
- 一方で、マイナスの評価も散見された。「経膣超音波は少し痛い時もあり、不安になる」など経膣超音波の不快感を表す記述、「超音波検査でリスクがあるなら、事前に知りたい」「・・・胎児が小さいなら、それがどんな理由でなのかわかしたらよいのかなど知りたかった。分かっただけで何もできず、不安だけ残った」など、医師の説明がないことへの不満、「あらかじめ胎児の異常に気付くことは、妊婦のストレスになるような気がする」など胎児に異常がわかった場合の不安感、逆に「妊娠初期の頃は、毎回検査ではなかったのも、最初の頃は流産しやすいし、不安だったので、毎回超音波検査して欲しかった」などの要望である。
- 少数ではあるが、費用が高いことや、画像が良く理解できないこと、実際との誤差が大きかったことなども記述されていた。

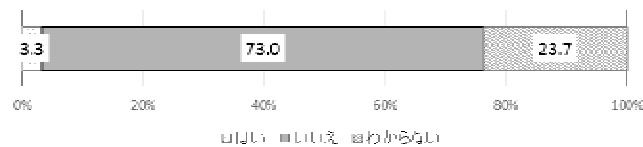
超音波検査10 頸部浮腫(けいぶふしゅ、NT)検査を受けましたか 【医療機関】

「胎児の頸部浮腫(NT)検査を受けたことがありますか。」という質問に「はい」「いいえ」「わからない」から回答してもらった。

医療機関調査は、「はい」が5名(3.3%)、「いいえ」が111名(73.0%)、「わからない」が36名(23.7%)で、「いいえ」が最も多かった。

NT検査の受検率は、1割未満と低かったが、検査を受けたか「わからない」という回答も少なくなかった。

図A-11 医療機関 NT検査を受けましたか



n=152、無回答4を除く

超音波検査10 頸部浮腫(けいぶふしゅ、NT)検査を受けましたか 【保育園】

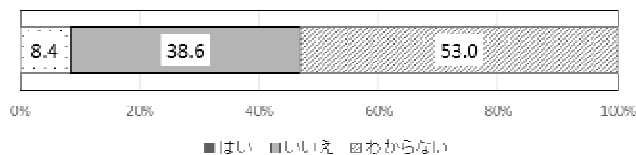
【保育園調査では、質問文の冒頭に下線部を追加している。】

「超音波検査で胎児のくびの後ろの厚みを図る、胎児の頸部浮腫(NT)検査を受けたことがありますか。」という質問に「はい」「いいえ」「わからない」から回答してもらった。

保育園調査は、「はい」が31名(8.4%)、「いいえ」が143名(38.6%)であるが、「わからない」196名(53.0%)は、半数以上であった。

NT検査の受検率は、1割未満と低かったが、検査を受けたか「わからない」という回答が最も多かった。

図A-11 保育園 NT検査を受けましたか



n=370、無回答8を除く

超音波検査10 NT検査①受検の経緯と②結果と対応

NT検査を受検したという方に「①この検査についての医療者からの説明や、検査を受けることになった経緯を簡単に教えてください。」「②検査結果と、それにどのように対応したかを教えてください。」と質問し、記述で回答してもらった。

- 医療機関調査では、NT検査を受けることになった経緯について記述されていた特徴は、NT検査についての知識があったことと、受けることを最初から希望していたことであった。NT検査の結果、異常があるという回答はなかった。
- 保育園調査では、NT検査を受けることになった経緯について記述していた29名のうち、半数弱は「通常の健診時に『くびのむくみはありません』と言われた。特に説明はなし」など、NT検査を受けるかどうか尋ねられないまま、通常の妊婦健診で実施されていた。他に、「NTというのがあるそうだから調べて欲しいと自分から言いました」など自分から希望した人も複数いた。NT検査の結果については、無回答があったが、ほとんどは「異常なし」という結果であった。ただ、中には（人工流産か死産の）「手術を受けた」という記述や、「配偶者と相談して経過をみることにした」という人もいた。

超音波検査11 NT検査についての気持ちや考え【保育園】

（回答者全員に対して）「頸部浮腫（NT）検査についての、あなたのお気持ちやお考えを聞かせてください」という質問し、記述で回答してもらった。【保育園調査のみの質問】

- 209名の記述があったが、そのうち86名は「わからない」「覚えていない」といった回答であり、「特になし」など無記入に近いものを合わせると90名がNT検査についての気持ちや考えを回答してなかった。
- NT検査について記述していた119名の中でも、自分がNT検査を受けたかどうかわからない、と答えた人たちがいた。「今になって思い出すと、私たちがクワトロテストを受ける前か後に、医師から首の後ろの厚みがないから、問題はないでしょう、と言われた」など、通常の妊婦健診でNT検査を実施している、と思われる記述があった。
- 「受ける必要性があるなら医師から話があると思っている」というように、NT検査を受けるかどうかの確認が医師からなかったのは、自分は受ける必要がない、と認識している人もいた。
- 自らインターネットでNTについて調べたと記述した人たちも10名ほどいた。
- その他にNT検査についての気持ちや考えとして、「急に経過観察と言われたり、子供がダウン症かもしれないと言われ不安になった」、「もし異常があった場合、次の詳しい検査や出産前後のリスクについて心構えでできるのではないかと思います。」、「これがどんな病気の発見につながるか、事前にパンフレットでももらえていた方がよいと思うが、病院はどこも忙しそうで、その余裕はないように感じる。」など様々あった。

B 母体血清マーカー検査に関する経験

質問開始冒頭に「『トリプルマーカー』や『クアトロテスト』などとも呼ばれる特別な検査です。結果は確率で出されます。すべての病院で行っているわけではありません。妊婦の血液から胎児の状態を推定します」と検査についての説明をしています。

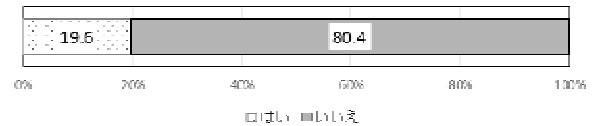
マーカー検査1 医療施設に行く前に得ていた情報

「その妊娠で医療施設へ行く前に、母体血清マーカー検査について何か情報を得ていましたか」という質問に「はい」「いいえ」で回答してもらった。

医療機関調査では、記入のあった143名のうち、「はい」が28名(19.6%)、「いいえ」が115名(80.4%)で、その妊娠で病院へ行く前に母体血清マーカー検査の情報を得ていない人の方が多いという結果であった。

保育園調査では、記入のあった350名のうち、「はい」が55名(15.7%)、「いいえ」が295名(84.3%)で、その妊娠で病院へ行く前に母体血清マーカー検査の情報を得ていない人の方が多いという結果であった。

図B-1 医療機関 マーカー検査の事前情報入手



n=143、ただし、無回答13を除く

図B-1 保育園 マーカー検査の事前情報入手



n=350、ただし、無回答28を除く

マーカー検査1 事前に得ていた情報 ①具体的内容【医療機関】

医療施設へ行く前に、母体血清マーカー検査について何か情報を得ていたと回答した人に、「どのような情報や内容が得られましたか」と尋ね、記述式で回答してもらった。

- 医療機関調査では、事前の情報を得ていた28名のうち18名が記述していた。回答内容は、「検査の方法や精度に対する評価」「検査によって何がわかるか」「その他」に分類した。
- 「胎児に障害のある確率がわかる」というように、この検査が「確率」で結果がでること、結果が「確実ではない」「確定診断ではない」「全てがわかるわけではない」など、検査の精度や限界について記述した回答が11件あった。この検査で異常・障がい等がわかることが記述されていたのは5件あった。
- 回答に、「異常」という用語が用いられていたのは7件あった。この7件をさらに分類したところ、「異常」「染色体異常」「先天異常」などがあった。このほかに「障害・障がい」という用語、「ダウン症」という用語も複数にみられた。
- 「その他」には、「結果についての考え方」「陽性のときには羊水検査がすすめられること」などがあつた。

マーカー検査1 事前に得ていた情報 ①具体的内容【保育園】

医療施設へ行く前に、母体血清マーカー検査について何か情報を得ていたと回答した人に、「どのような情報や内容が得られましたか」と尋ね、記述で回答してもらった。

- 保育園調査では事前の情報を得ていた55名のうち42名が記述していた。回答の内容は、「検査の方法や精度に対する評価」「検査によって何がわかるか」「その他」に分類した。
- 「胎児に障害のある確率がわかる」というように、この検査が「確率」で結果がでることについては6件の記述があった。結果が「確実ではない」「完全にわかるわけではない」など、検査の精度や限界についての記述が複数あった。
- 回答に「異常」という用語が用いられていたのは7件あった。この中には、「異常」「染色体異常」「先天異常」などがあった。このほかに「障害・障がい」という用語、「ダウン症」という用語などもみられた。
- 「その他」には、「結果についての考え方」「陽性のときには羊水検査がすすめられること」「事前に線引きしていないと、結果を知った後では、判断に苦しむ」という検査後の意思決定にかかわる記述や、「確率が高くても低くても納得感が低い検査」という検査の短所を指摘する評価もあった。さらに「35才以上の妊娠には推奨されている」など検査を受ける人についての基準の記述もあった。

マーカー検査1 事前に得ていた情報 ②入手源

医療施設へ行く前に、母体血清マーカー検査について何か情報を得ていたと回答した人に、(情報や内容を得たのは)「それは誰からですか」と尋ね、記述式で回答してもらった。また、「それは何からですか」と尋ね、「インターネット」「雑誌・書籍」「テレビ」「その他(具体的に)」の選択肢から複数回答で回答してもらった。

- 医療機関調査では「事前の情報を得ていた」と答えた28名のうち11名の記入があった。
- 保育園調査では「事前の情報を得ていた」と答えた55名のうち22名の記入があった。
- 「それは誰からですか」という質問については、医療機関調査では「知人・友人」「医療者」という回答が多く、「家族」も若干あった。このうち、友人には「検査をした」人に限定した記述もあった。家族は「夫」と「親」だった。その他に自分自身の経験・知識という回答もあった。
- 保育園調査でも「知人・友人」「医療者(「知り合いの医師」も含む)」という回答が多く、「家族」が若干あった。家族は「親」のみであり、友人には「検査を受けた友人、受けなかった友人」という記述があった。その他、「自己学習」や「自分で」、「本人が医療職のため、教育を受けた」などの回答があった。

マーカー検査1 事前に得ていた情報 ③情報源

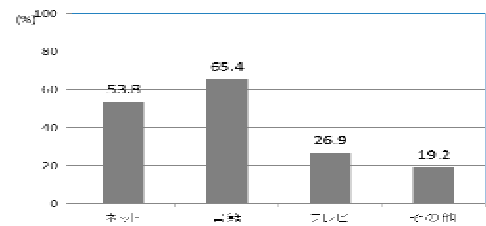
医療施設に行く前に、母体血清マーカー検査について何か情報を得ていたと回答した人に、何から情報を得ていたかを「インターネット」「雑誌・書籍」「テレビ」「その他(具体的に)」から複数回答で尋ねた。

医療機関調査では、事前に情報を得ていたと回答した28名のうち、無回答を除く26名から43件の回答があった。17件(65.4%)が「書籍」から情報を得たと回答し、続いて「インターネット」14件(53.8%)、「テレビ」7件(26.9%)、また「その他」は5件(19.2%)であった。

保育園調査では、事前に情報を得ていたと回答した55名のうち、無回答の5名を除く50名から71件の回答があった。30件(60.0%)が「インターネット」から情報を得たと回答し、続いて「書籍」24件(48.0%)、「テレビ」6件(12.0%)、また「その他」は11件(22.0%)であった。

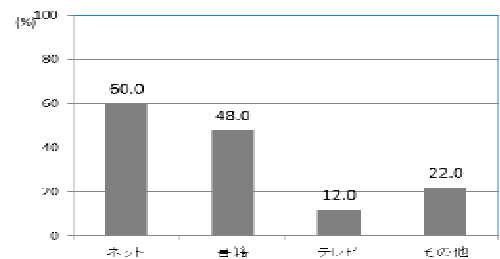
雑誌・書籍、インターネットを中心として、母体血清マーカー検査について事前に情報を得ていた人が多くいたことがわかる。

図B-2 医療機関 マーカー検査の情報入手方法



n=26(43件)、ただし事前に情報を得た28のうち、無回答2を除く

図B-2 保育園 マーカー検査の情報入手方法



n=50(71件)、ただし事前に情報を得た55のうち、無回答5を除く

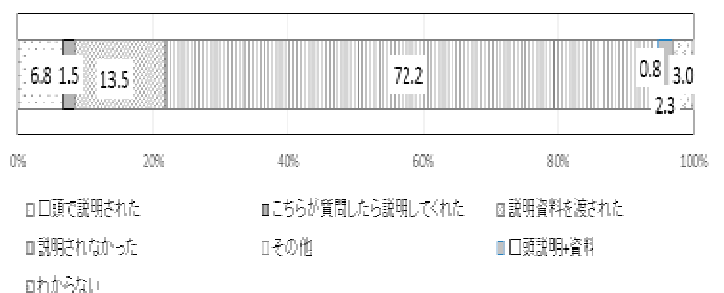
マーカー検査2 医療者からの説明【医療機関】

「医療者からマーカー検査の目的、方法、リスクなどを説明されましたか」という質問に対し、「口頭で説明された」「こちらから質問したら説明してくれた」「説明資料を渡された」「説明されなかった」「その他」の中から1つ回答してもらった。

医療機関調査では、記入のあった133名のうち、「説明されなかった」が96名(72.2%)と最も多く、次に「説明資料を渡された」が18名(13.5%)、「口頭で説明された」が9名(6.8%)、「こちらが質問したら説明してくれた」が複数名であった。「わからない」は数名であった。また「口頭で説明された」「説明資料を渡された」の両方を選択した人がそれぞれ複数いた。「その他」はわずかであった。

つまり、なんらかの方法で説明されたと答えた人は、医療機関調査では32名になり、検査について説明されていない人の方が多かった。なお、「その他」を選択した人の具体的な記述の多くは「説明の内容を覚えていない」であった。

図B-3 医療機関 マーカー検査の医療者からの説明



n=133、ただし、無回答23を除く

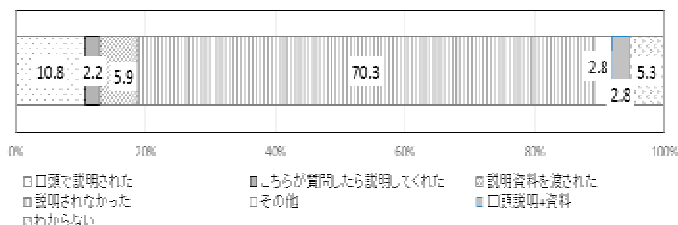
マーカー検査2 医療者からの説明【保育園】

「医療者からマーカー検査の目的、方法、リスクなどを説明されましたか」という質問に対し、「口頭で説明された」「こちらから質問したら説明してくれた」「説明資料を渡された」「説明されなかった」「その他」の中から1つ回答してもらった。

保育園調査では、記入のあった323名のうち、「説明されなかった」が227名(70.3%)と最も多く、次に「口頭で説明された」が35名(10.8%)、「説明資料を渡された」が19名(5.9%)、「わからない」が17名(5.3%)、「こちらが質問したら説明してくれた」が7名(2.2%)であった。また、「口頭で説明された」「説明資料を渡された」の両方を選択したのが9名(2.8%)、「その他」は9名(2.8%)であった。

つまり、なんらかの方法で説明されたと答えた人は、保育園調査では67名になり、どちらも、検査について説明されていない人の方が多かった。なお、「その他」を選択した人の具体的な記述の多くは「説明の内容を覚えていない」であった。

図B-3 保育園 マーカー検査の医療者からの説明



n=323、ただし、無回答55を除く

マーカー検査2 医療者からの説明 ①具体的内容

医療者から母体血清マーカー検査の目的、方法、リスクなどについて、口頭や資料なども含め、何らかの説明を受けたと回答した人に、「それはどのような内容でしたか」と尋ねた。

- ・ 具体的内容を記述していたのは医療機関調査では16名、保育園調査では48名であった。このうち、「覚えていない」「忘れた」といった記述もあった。
- ・ 説明の具体的な内容については、保育園調査のみ「目的・方法・リスクの説明があった」と記述された回答があった。結果が、「確率で出る」こと、「確実ではない」ことなど、検査結果の示され方について書かれた回答もあった。
- ・ 異常(染色体異常・先天異常を含む)・障害・ダウン症などの単語もいくつかみられた。
- ・ 「費用についての説明があった」という記述も複数みられた。
- ・ 説明の仕方として、資料やパンフレットなどを渡された、と回答した人も複数いた。
- ・ 検査を受けることに対する医療者の意見や姿勢について書かれた回答もあった。その内容はつぎの3タイプに分けられた。①受ける必要はない、②「希望があれば」など、受けるか受けないかは、妊婦が選択すべき検査である、③「心配があれば」「リスクが高い」「高齢出産なので」など、何らかの条件にあえば検査を勧める。

マーカー検査2 医療者からの説明 ②評価とその理由

医療者から母体血清マーカー検査の目的、方法、リスクなどについて、口頭や資料なども含め、何らかの説明を受けたと回答した人に、「その説明に満足しましたか」と尋ね、「はい」「いいえ」で回答してもらった。さらに、その理由についても尋ねた。

医療機関調査では、医療者から説明を受けたと回答した32名のうち、無回答の5名を除く27名の回答があった。「はい」(満足)が26名(96.3%)と多かった。

保育園調査では、医療者から説明を受けたと回答した67名のうち、無回答を除く63名の回答があった。「はい」が59名(93.7%)と多かった。

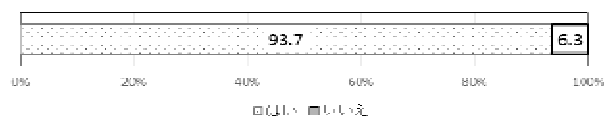
医療機関調査と保育園調査ともに、医療者から母体血清マーカー検査について説明を受けた人のほとんどは、その説明に満足したことがわかる。

図B-4 医療機関 マーカー検査 医療者からの説明に満足



n=27、ただし説明を受けたと回答した32のうち、無回答5を除く

図B-4 保育園 マーカー検査 医療者からの説明に満足



n=63、ただし説明を受けたと回答した67のうち、無回答4を除く

マーカー検査2 医療者からの説明 ②評価とその理由 医療者からの説明に満足した／不満だった理由 具体的内容

「その説明に満足しましたか」との質問に答えた人に、その理由を記述で回答してもらった。

- 説明に満足した理由として、「詳細な説明だった」や「詳しい説明を必要としていなかった」等の説明の詳しさや、検査の欠点に言及されていたことなどの「説明の質」をあげた回答、「判断につながった」や「納得した」というような「説明が判断につながったこと」をあげた回答、そして「医師の説明に頼るつもりがなかった」というような、「説明に期待しないこと」をあげた回答がみられた。
- 説明に満足しなかった理由として、検査についての説明はあったが「検査をするかしないかの判断に迷った」こと、資料を渡されたが「受けるべきなのか悩んでしまった」こと、「先生は忙しいイメージなのでくわしく聞くのも気がひける」ことなどの記述があった。

マーカー検査3 医療者からの「検査を受けるかどうか」についての質問

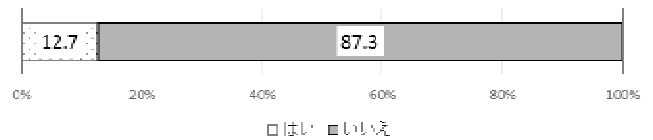
「母体血清マーカー検査を受けるかどうか、医療者からたずねられましたか」という質問に対し、「はい」「いいえ」で回答してもらった。

医療機関調査では、回答のあった134名のうち、「はい」は17名(12.7%)、「いいえ」が117名(87.3%)であった。

保育園調査では、回答のあった335名のうち、「はい」は43名(12.8%)、「いいえ」が292名(87.2%)であった。

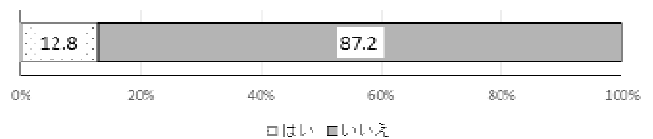
医療機関調査と保育園調査ともに、母体血清マーカー検査を受けるかどうか医療者から尋ねられていない人の方が多い結果となった。

図B-5 医療機関 マーカー検査について医療者からの質問



n=134、ただし、無回答21を除く

図B-5 保育園 マーカー検査について医療者からの質問



n=335、ただし、無回答40を除く

マーカー検査3 医療者からの「検査を受けるかどうか」についての質問 ①時期

母体血清マーカー検査を受けるかどうか、医療者から尋ねられた、と回答した人に、「それはいつ頃のことですか。」と時期を尋ねた。「初診時」「妊娠が確定したとき」「超音波検査でさらに検査が必要だと言われたとき」「その他」の4つの選択肢から回答してもらい、妊娠何週頃かについても尋ねた。

- 医療機関調査では、医療者から尋ねられたと回答した17名のうち、無回答を除く15名の回答があった。「妊娠が確定したとき」が8名(53.3%)、「初診時」が7名(46.7%)であった。
- 保育園調査では、医療者から尋ねられたと回答した43名のうち、無回答の8名を除く35名の回答があった。「妊娠が確定したとき」が20名(57.1%)と最も多く、また「その他」が9名(25.7%)であった。「初診時」や「超音波検査でさらに検査が必要だと言われたとき」を選んだ人もいた。なお、「その他」の具体的な内容としては、「妊娠初期」という回答があった。また「覚えていない」「わからない」などの回答もあった。
- 医療機関調査と保育園調査ともに、母体血清マーカー検査を受けるかどうか尋ねられた人は1割強しかいなかったが、尋ねられた時期は、「妊娠が確定したとき」が多かった。

マーカー検査4 検査を受けましたか

「母体血清マーカー検査を受けましたか」という質問に、「はい」「いいえ」で回答してもらった。

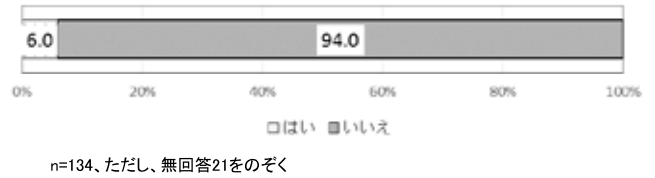
医療機関調査では、回答のあった134名のうち、「はい」は8名(6.0%)、「いいえ」が126名(94.0%)であった。

保育園調査では、回答のあった333名のうち、「はい」は35名(10.5%)、「いいえ」が298名(89.5%)であった。

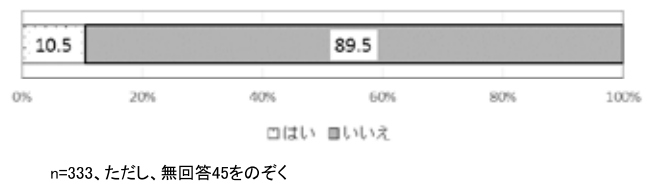
医療機関調査と保育園調査ともに、母体血清マーカーを受けなかった人が大多数であった。

母体血清マーカー検査を受けた割合は、両調査の結果にやや差がみられた。この理由は、保育園調査の方が回答者の妊娠年齢がやや高かったことが影響していると考えられる。それ以外の理由については今後の検討課題とする。

図B-6 医療機関 マーカー検査を受けましたか



図B-6 保育園 マーカー検査を受けましたか



マーカー検査5 受けた/受けなかった理由

母体血清マーカー検査を受ける理由または受けない理由を教えてください」と記述で回答してもらった。

- 医療機関調査では、母体血清マーカー検査を受けたと答えた8名のうち7名が記述、検査を受けなかったと答えた126名のうち100名が記述していた。
- 保育園調査では、母体血清マーカー検査を受けたと答えた35名のうち32名が記述していた。検査を受けなかったと答えた298名のうち233名が記述していた。
- 医療機関調査と保育園調査のどちらの調査でも、母体血清マーカー検査を受けなかった人の回答では、「(この検査について)知らなかったから」という答えが目立った。その他には、「受けたかどうかがわからない」「医師に(受けるように)言われなかった」や「受ける必要を感じなかった」「産むと決めていた」「自分は検査が必要ではないから」という回答もあった。
- 一方、検査を受けた人の回答の中には、「高齢出産だったため、リスクが気になった」や「不安だったから」という記述があった。また、「配偶者にすすめられた」や「障がいのある子を生む準備のため」という回答もみられた。

マーカー検査6 検査を受ける／受けないかを誰が決めたか 【医療機関】

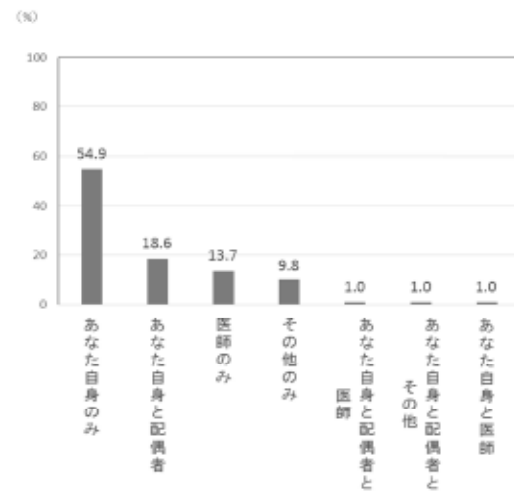
「母体血清マーカー検査を受けるか、受けないかを誰が決めましたか」と尋ね、「あなた自身」「配偶者」「医師」「その他(具体的に)」の4つの選択肢から複数回答で尋ねた。

回答の組み合わせをみると、医療機関調査では、回答のあった102名のうち、56名(54.9%)が「あなた自身」が決めたと回答し、「あなた自身」と「配偶者」が19名(18.6%)、「医師」のみが14名(13.7%)となった。

それ以外の組み合わせも若干あった。「その他」のみは10名(9.8%)だった。

ただし、無回答が54名と、かなり多かった。とくに検査を受けなかった人は、受けるか受けないかを考える機会がなく、誰かが決めたという意識がない、などが予測されるため、無回答が多い理由については、今後さらに検討していきたい。

図B-7 医療機関 マーカー検査 受ける/受けないかを決めた人



n=102、ただし、無回答54をのぞく

マーカー検査6 検査を受ける／受けないかを誰が決めたか 【保育園】

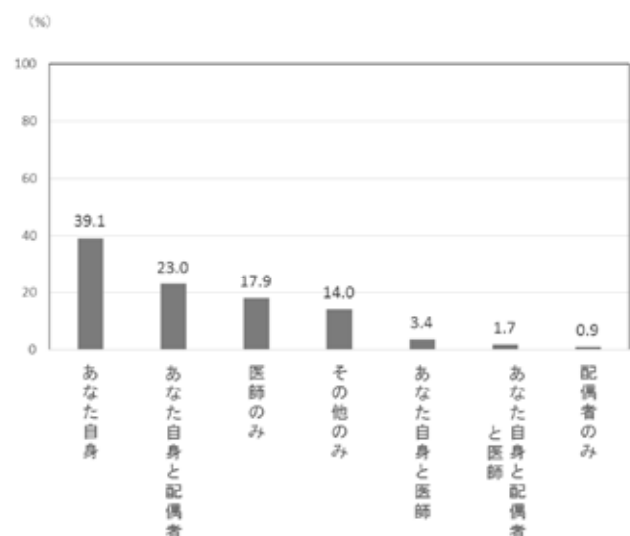
「母体血清マーカー検査を受けるか、受けないかを誰が決めましたか」と尋ね、「あなた自身」「配偶者」「医師」「その他(具体的に)」の4つの選択肢から複数回答で尋ねた。

回答の組み合わせをみると、保育園調査では、回答のあった235名のうち、92名(39.1%)が「あなた自身」が決めたと回答し、「あなた自身」と「配偶者」が54名(23.0%)、「医師」のみが42名(17.9%)、「あなた自身と医師」が8名(3.4%)、「あなた自身と配偶者と医師」と「配偶者」のみが数件ずつあった。「その他」のみは33名(14.0%)であった。

医療機関調査と保育園調査でやや数値に差があるが、母体血清マーカー検査を受けるかどうか「あなた自身」が決めたという回答がどちらも最も多くなった。一方で、「医師」のみという回答も、両者とも比較的多くあることが注目される。

ただし、無回答が143名と、かなり多かった。とくに検査を受けなかった人は、受けるか受けないかを考える機会がなく、誰かが決めたという意識がないなどが予測されるため、今後さらに検討していきたい。

図B-7 保育園 マーカー検査 受ける/受けないかを決めた人



n=235、ただし、無回答143をのぞく

マーカー検査7 検査結果

「母体血清マーカー検査の結果について教えてください」という質問に対し、「陰性(1/295以下)」「陽性(1/295以上)」「その他(具体的に)」の3つの選択肢から回答してもらった。

- 医療機関調査では、マーカー検査を受けたと回答した8名のうち、陰性が6名(75.0%)、陽性は2名(25.0%)であった。
- 保育園調査では、マーカー検査を受けたと回答した35名のうち、検査結果について回答があった人は31名で、陰性が24名(77.4%)と多く、陽性は2名(6.5%)、その他が5名(16.1%)であった。その他の5名の内訳は「検査中」の人がいたが、他は「覚えていない」「わからない」「忘れた」などであった。
- 医療機関調査、保育園調査ともに、検査を受けた人のうち、結果が陰性と回答した人の方が多かった。

※検査結果についての数値は、少数であってもこの調査には必要であると判断して、4名以下の場合も示した。

マーカー検査7 ①②③検査による異常の発見

「母体血清マーカー検査の結果について教えてください」という質問に対し、さらに付問で①「結果を聞いたのは妊娠何週頃ですか」、②「そのときどのように感じましたか」、③「その後どうされましたか」、を回答してもらった。

- 結果を聞いた妊娠週数は、医療機関調査では、6名の回答があり、うち4名は具体的な週数を回答しており、15～20週の範囲であった。残る2名は「おぼえていない」という回答であった。保育園調査では、11名の回答があり、うち10名が妊娠週数を回答しており、13～20週であった。残る1名は「初期」という記述であった。
- 結果を聞いて感じたこととして、医療機関調査では「陰性(1/295以下)」の6名のうち記述のあった4名は「安心した」といった内容であり、その後妊娠を継続したことが書かれていた。一方「陽性(1/295異常)」の2名は「正直、ショックだったし不安だった」「おどろいた」と記述し、そのうち1名はその後「羊水検査を希望した」とのことであった。
- 保育園調査では、「陰性(1/295以下)」の24名のうち記述のあった15名のうち10名は「安心した」など「安心」という言葉が入っていた。他は「良かった」「ホッとした」といった内容で、その後も「何もませんでした」「特になし」などであった。しかし「後日、異状が見つかり、結局出産にいたらず」という回答もあった。一方「陽性(1/295異常)」の2名は「羊水検査を受けた」人と「羊水検査にはすまなかった」人が1名ずついた。

※検査結果についての数値は、少数であってもこの調査には必要であると判断して、4名以下の場合も示した。

マーカー検査7 ④結果を知らせた相手

「検査結果を誰に知らせましたか」と尋ね、「配偶者」「自分の親」「配偶者の親」「その他(具体的に)」「誰にも知らせていない」の5つの選択肢から複数回答で尋ねた。ここでは、検査の結果を知らせた相手の組み合わせをみていく。

- 医療機関調査では、マーカー検査を受けたと回答した8名で、全員から回答があった。「配偶者のみ」に知らせた人が半数あり、その他に、「配偶者と自分の親」、「配偶者と自分の親とその他」、「誰にも知らせていない」などの回答の組み合わせがあった。
- 保育園調査では、マーカー検査を受けたと回答した35名のうち、回答があったのは27名である。「配偶者と自分の親」に知らせた人がおよそ4割を占めた。その他に、「配偶者のみ」、「配偶者と自分の親と配偶者の親」、「誰にも知らせていない」などの回答の組み合わせがあった。

マーカー検査8 検査についての気持ちや考え【医療機関】(1)

(回答者全員に対して)「母体血清マーカー検査についてあなたのお気持ちやお考えをお聞かせください」と質問し、記述での回答を求めた。

- 医療機関調査では70名の記述があり、積極的な評価、消極的な評価、そのどちらも記入された回答に分かれる傾向がみられた。
- 積極的な評価としては、「羊水検査よりも手軽で、安全性も高く、これで検査が受けられるのはとても良かった」など、採血だけで済む検査なので、流産の危険がなく受けられることを評価したもの、「検査方法が存在するのであれば、不安を取り除く意味で受けてよかったと思う。陽性だった場合にも心の持ち方が変わるので必要な検査だと思います」など、不安の解消や出産への心構えをする上で必要だとする意見があった。
- 自分の妊娠において何らかのリスク要因がある場合なら受けるかもしれない、とか、自分の意思で受けないというよりも「選択肢があるのは良い」「受けない人が受ければ良い」など選択肢が存在していることを、積極的に評価している記述もあった。

マーカー検査8 検査についての気持ちや考え【医療機関】(2)

- 消極的な評価としては、異常の可能性が高いと指摘された場合にも、治療の方法がないために受けたくない」と回答した人たちがいた。「調べても異常がある確率しかわからないものをしてしょうがない」、「妊娠している本人にしてみたら、どのような結果であれ混乱するだけの様な気がしてしまいます」などの記述があった。また、胎児の異常を検査して産まないことを選択することに対する批判的な記述もあった。「子どもがうまれるということは、全てをうけいれる必要がある」、「赤ちゃんの命を選別するような検査については私は受けたくないと思っている」などであった。
- どちらともいえない、迷う、という回答も少なくなかった。これらの回答には、積極的な評価をしつつも、消極的な評価についても記述されていた。迷う理由として記述されていた内容としては、①リスクや確率で結果が示される不確定な検査であることによる迷い、②結果を知って胎児を選別できるのかという悩み、③妊娠期間中の不安が、かえって大きくなるのではないかと不安、④生まれてくる子どもや、自分たちの生活の将来を考えて、結果によっては産まない選択をするのではないかと戸惑いなどがあった。④は「結果を聞いて異常であった場合、どうするべきか、悩むし、辛い思いをします。自分は生みたくても、両親(自分の)や周囲から反対されるとは思いますので、悲しいです。でも、産んでから一生のことを考えれば、周囲の意見もきっと受け入れると思います」といった記述に代表される。

マーカー検査8 検査についての気持ちや考え【保育園】

(回答者全員に対して)「母体血清マーカー検査についてあなたのお気持ちやお考えを聞かせてください」という質問し、記述で回答してもらった。

- 保育園調査では191名の記述があり、医療機関調査と同様、積極的な評価と消極的な評価に分かれる傾向がみられた。積極的な評価、消極的な評価の内容も、医療機関調査の内容と同じ傾向があった。
- 「この検査を知らなかった」という記述も多くあった。それに対して「病院からは何もアナウンスメントは無く、知っていたとしても受けていないと思うのですが、こうして情報弱者になると差が出てしまうのかなと不安にもなります」など不公平感を持つ人がいる一方で、「どういう検査なのか教えてほしかった。でも、順調で異常があるとは考えられない場合は、不安をあおるだけなので必要ないとも思う」と、知って受けるかどうかの判断を迫られた場合、胎児の異常に対して「不安をあおるだけ」になることを懸念する人もいた。
- また、この検査に対する医療者の対応として、子どもがダウン症だという母親は「検査が進むのは良いかもしれないけど、結果が出たあとの母体の心のケアのことetcのソフト面についてもっと考えてほしい。お医者がマイナスイメージで話すと母はそれを全面的に信じるもの」と結果に対する説明の仕方への配慮や心理面でのバックアップを求める記述をしていた。
- 医療機関調査と同様に、検査をするかしないかに迷い、結果を知ったら悩むという記述も多くみられた。「検査については受けるか受けないかもそうだが結果が悪かった時、どのような決断をするか更に難しくなると思う」というような記述がみられた。

C 羊水検査に関する経験

質問開始冒頭に「妊娠中期に行われる検査で、お腹から子宮に針を刺して羊水をとり、羊水の成分や羊水中の胎児の細胞を調べるための検査です」と検査についての説明をしています。

羊水検査1 医療施設に行く前に得ていた情報

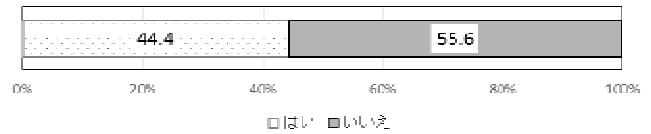
「その妊娠で医療施設へ行く前に、羊水検査について何か情報を得ていましたか。」という質問に「はい」「いいえ」で回答してもらった。

医療機関調査では、回答のあった142名のうち、「はい」が63名(44.4%)、「いいえ」が79名(55.6%)で、事前に羊水検査についての情報を得ていなかった人がやや多かった。

保育園調査では、回答のあった353名のうち、「はい」が161名(45.6%)、「いいえ」が192名(54.4%)で、事前に羊水検査についての情報を得ていなかった人がやや多かった。

羊水検査について事前に情報を得ていたと回答した割合は、母体血清マーカー検査について事前に情報を得ていたと回答した割合よりも高かった。

図C-1 医療機関 羊水検査の事前情報入手



n=142、ただし、無回答14を除く

図C-1 保育園 羊水検査の事前情報入手



n=353、ただし、無回答25を除く

羊水検査1 事前に得ていた情報 ①具体的内容

医療施設へ行く前に、羊水検査について情報を得ていたと回答した人に、「どのような情報や内容を得られましたか」と尋ね、記述で回答してもらった。

- 医療機関調査では「事前の情報を得ていた」と答えた63名のうち42名が、保育園調査では「事前の情報を得ていた」と答えた161名のうち127名がその内容を記述していた。その内容を、「検査でわかること」「検査の方法や精度等についての評価」「副作用」「その他」等に分類して検討した。
- 医療機関調査では、「検査でわかること」について最も多く言及されており、「染色体異常があるかないか」「胎児の異常を調べる」など「染色体異常」「胎児の異常」といった言葉が書かれており、具体的な障がい名には「ダウン症」が挙げられていた。また、副作用について言及した回答には、「危険性」「赤ちゃんにリスクがある」という抽象的なものから「まれに流産の危険もある」と具体的に記述したものまであった。その他、「確定診断である」など精度の高い検査であることを述べた回答もあった。ほかに、「35歳以上の妊娠に染色体異常の児が生まれる可能性が高いために調べる検査」と妊娠年齢に言及した回答や、費用について書かれたものもみられた。
- 保育園調査では、医療機関調査と同様に「検査でわかること」について、「染色体異常」「胎児の異常」とともに「ダウン症」という言葉も多く挙げられていた。また、副作用についても、「危険性」「リスク」という言葉が多く使われ、「流産の可能性がある」「流産の確率が上がる」など流産についても言及されていた。「確定診断」など精度に関わることや、「35歳以上の方はやった方がよい」など年齢への記述があるのも医療機関調査と同じであった。「クアトロテストの次に行く」のようにスクリーニング検査の後に行くこと、「倫理上の問題」と書かれた回答などは、医療機関調査には、見られなかった。

羊水検査1 事前に得ていた情報 ②入手源

医療施設へ行く前に、羊水検査について情報を得ていたと回答した人に、(情報や内容を得られたのは)「それは誰からですか」と尋ね、記述式で回答してもらった。

- 医療機関調査では「事前の情報を得ていた」と答えた63名のうち27名が、保育園調査では「事前の情報を得ていた」と答えた161名のうち66名がその内容を記述していた。
- 記述の内容は、「知人・友人」「家族・親族」などのほかに「医療者(医師、病院で)」「自分で調べた」「本人が医療職のため、教育を受けた」などの回答があった。
- 医療機関では、「知人・友人」が最も多く、「医療者(医師、病院で)」に関連したものが続いた。中には誰からではなく、「前の妊娠時に病院で」など、情報を得た場所が書かれたものもあった。
- 保育園調査でも同様の傾向があり、「知人・友人」が多かったが、「医療者(医師、病院で)」と並んで「家族・親族」に関連した記述があった。「夫」という回答も少数あった。「自分で」という回答もあった。中には「看護学校」のように場所を記述したものもあった。

羊水検査1 事前に得ていた情報 ③情報源

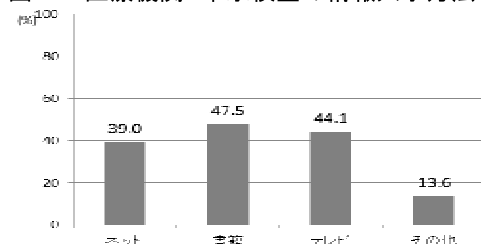
医療施設に行く前に、羊水検査について情報を得ていたと回答した人に、何から得たかを「インターネット」「雑誌・書籍」「テレビ」「その他(具体的に)」の選択肢から複数回答で尋ねた。

医療機関調査では、羊水検査について事前に情報を得ていたと回答した63名のうち、無回答を除く59名から85件の回答があった。「雑誌・書籍」28件(47.5%)、「テレビ」26件(44.1%)、「インターネット」24件(39.0%)、「その他」は8件(13.6%)であった。

保育園調査では、羊水検査について事前に情報を得ていたと回答した161名のうち、無回答の14名を除く147名から221件の回答があった。「雑誌・書籍」90件(61.2%)、「インターネット」71件(48.3%)、「テレビ」38件(25.9%)、「その他」は22件(15.0%)であった。

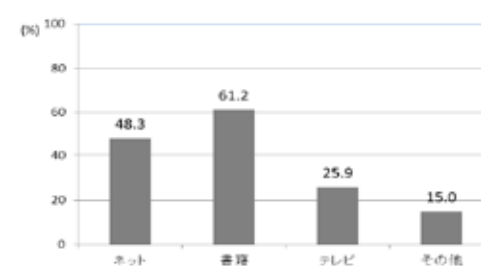
医療機関調査で「テレビ」の割合が多かったのは、調査時点で妊娠中の人が多く、その時期に新型出生前検査の報道等が多かったためと推察される。

図C-2 医療機関 羊水検査の情報入手方法



n=59(85件)、ただし事前に得ていたと回答した63のうち、無回答4を除く

図C-2 保育園 羊水検査の情報入手方法



n=147(221件)、ただし事前に得ていたと回答した161のうち、無回答の14を除く

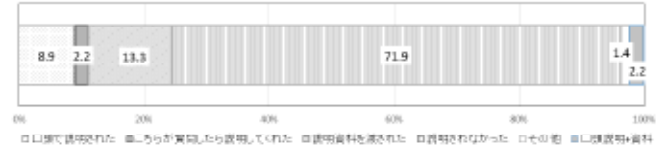
羊水検査2 医療者からの説明【医療機関】

「医療者から羊水検査の目的、方法、リスクなどを説明されましたか」という質問に対し、「口頭で説明された」「こちらから質問したら説明してくれた」「説明資料を渡された」「説明されなかった」「その他」の中から1つを選択してもらった。

医療機関調査では、記入のあった135名のうち、「説明されなかった」が97名(71.9%)と最も多く、次に「説明資料を渡された」が18名(13.3%)、「口頭で説明された」が12名(8.9%)あった。「こちらが質問したら説明してくれた」「その他」が少数あった。また、「口頭で説明」と「説明資料を渡された」の両方を選択した人も複数いた。

説明された人の内訳が異なるのは、説明にいたる医療機関の方針(事前に資料を渡して質問を受けるなど)が影響していると考えられる。また、助産所が含まれていることの影響もあると推測される。

図C-3 医療機関 羊水検査の医療者からの説明



n=135、ただし、無回答21を除く

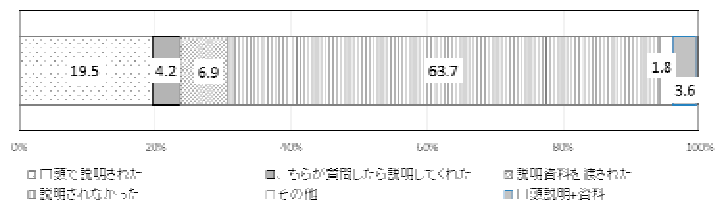
羊水検査2 医療者からの説明【保育園】

「医療者から羊水検査の目的、方法、リスクなどを説明されましたか」という質問に対し、「口頭で説明された」「こちらから質問したら説明してくれた」「説明資料を渡された」「説明されなかった」「その他」の中から1つを選択してもらった。

保育園調査では、記入のあった333名のうち、「説明されなかった」が212名(63.7%)と最も多く、次に「口頭で説明された」が65名(19.5%)、「説明資料を渡された」が23名(6.9%)、「こちらが質問したら説明してくれた」が14名(4.2%)あった。また、「口頭で説明」と「説明資料を渡された」の両方を選択したのが12名(3.6%)いた。「その他」は7名(1.8%)であった。

口頭で説明されたという割合が高かったのは、妊娠時の年齢の影響が考えられる。

図C-3 保育園 羊水検査の医療者からの説明



n=333、ただし、無回答45を除く

羊水検査2 医療者からの説明 ①具体的内容【医療機関】

医療者から羊水検査の目的、方法、リスクなどについて、口頭や資料なども含め、何らかの説明を受けたと回答した人に、「それはどのような内容でしたか」と尋ねた。

- 医療機関調査では24名が説明の内容について記述していた。
- 医療機関調査では、流産のリスクについて説明された人が多かった。その一方で検査を受けるかどうかについて、妊婦の目を通してではあるが、医師の妊婦への関わり方がわかる内容も記述されていた。「15weeks以降するかしないかは夫婦で決めて下さい。と言われました」という事例のように医師ではなく、夫婦が決めることを説明した内容。「高令だし、胎児発育が悪いので受けた方がよい」と医師が受けることを勧めた内容などである。
- 他方で「何の目的ですか、結果で命の選別を行うようなことができるのか、考えるよう言われた」と慎重に決めるように促した内容など、医師のこの検査に対する姿勢がうかがえる記述がいくつかあった。
- 他に、「先天異常に関する検査」など検査の目的についての内容や、「カウンセリングが必要」など検査の流れについても書かれていた。

羊水検査2 医療者からの説明 ①具体的内容【保育園】

医療者から羊水検査の目的、方法、リスクなどについて、口頭や資料なども含め、何らかの説明を受けたと回答した人に、「それはどのような内容でしたか」と尋ねた。

- 保育園調査では75名が説明の内容について記述していた。
- 保育園調査でも、流産のリスクについての説明が多数だったが、胎児の障がい調べるためのもの、など検査の目的について書いている人も多くいた。妊婦の目を通してではあるが、医師の妊婦への関わり方がわかる内容も、医療機関調査と同様に記述されていた。「先天性異常があった場合、出産前にみつける事が出来、産む産まないの選択が出来ること」「ダウン症の子供を望まないのであれば受けた方がいいとすすめられた」など、医師が検査を受けることを婉曲的に勧めていたという記述がある一方で、「羊水検査というものがあるが、受けなくてよい、というような内容」「リスク高いからやめておいた方がよい」など医師が検査を勧めなかったという記述もあった。
- 出産してから時間が経っている人が一定程度いたためか、「覚えていない」など記憶があいまいになっている人たちも複数いた。

羊水検査2 医療者からの説明 ②評価とその理由

医療者から羊水検査の目的、方法、リスクなどについて、口頭や資料なども含め、何らかの説明を受けたと回答した人に、「その説明に満足しましたか」と尋ね、「はい」「いいえ」で回答してもらった。

医療機関調査では、説明を受けたと回答した36名のうち、無回答の6名を除く30名の回答があった。「はい」(満足)が24名(80.0%)と多く、「いいえ」は5名(16.7%)だった。「わからない」がわずかにあった。

保育園調査では、説明を受けたと回答した104名のうち、無回答の26名を除く78名の回答があった。「はい」(満足)が72名(92.3%)と多く、「いいえ」は6名(7.7%)であった。

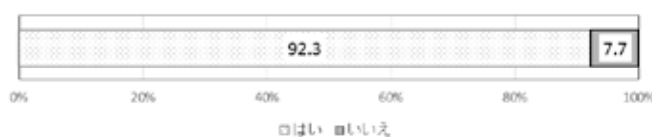
医療機関調査と保育園調査ともに、母体血清マーカー検査と同じく、説明を受けた人の多くはその説明に満足したという結果になった。医療機関調査のほうが満足しなかったという回答の割合が高くなっているが、この理由については今後検討していく。

図C-4 医療機関 羊水検査 医療者からの説明に満足



n=30、ただし医療者からの説明ありと回答した36のうち、無回答8を除く

図C-4 保育園 羊水検査 医療者からの説明に満足



n=78、ただし医療者からの説明ありと回答した104のうち、無回答26を除く

羊水検査2 医療者からの説明 ②評価とその理由 医療者からの説明に満足した／不満だった理由 具体的内容

「その説明に満足しましたか」との質問に答えた人に、その理由を記述で回答してもらった。

- 説明に満足した理由として、「わかりやすかった記憶がある」や「細く説明してくれたので」等の説明の詳しさやわかりやすさ、「その検査で陰性でも、他の病気・障がいのリスクもあるとも言われ、しないことに納得できた」など検査の限界に言及されていたことなどの「説明の質」をあげた回答、「自分でさらに真剣に考えるようになった」「判断に必要な情報があったから」というような「説明が判断につながったこと」をあげた回答、そして「医師の説明にはあまり期待しなかった」「特に重要視していなかったから」というような、医師の説明や検査を受けることに期待しないことをあげた回答があった。その他に「メンタルな部分は別室で助産師さんが説明してくれたから」「希望時にはきちんと説明して下さるというのが、わかったので」など説明を受ける際の環境的な配慮や信頼感を挙げた人もいた。
- 説明に満足しなかった理由として、検査についての説明はあったが「リスクの説明がなかった」「簡単な説明だった」「内容が不十分」など説明の詳しさに関わること、「検査を受けて異常を知ってどうするの?と淡々と言われて、とてもイヤな気持ちになった」など心理的に不快感を感じたことなどが書かれていた。

羊水検査3 医療者からの「検査を受けるかどうか」についての質問

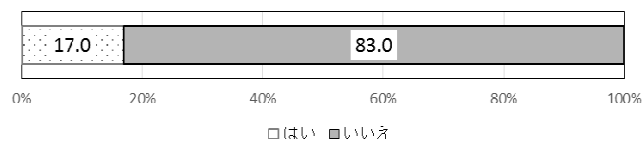
「羊水検査を受けるかどうか、医療者からたずねられましたか。」という質問に対し、「はい」「いいえ」で回答してもらった。

医療機関調査では、回答のあった141名のうち「はい」は24名(17.0%)、「いいえ」が117名(83.0%)であった。

保育園調査では、回答のあった343名のうち、「はい」は70名(20.4%)、「いいえ」が273名(79.6%)であった。

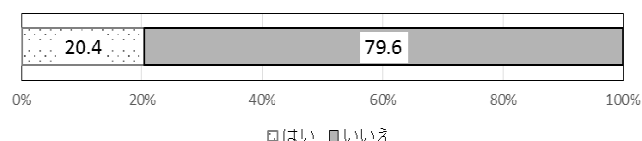
医療機関調査と保育園調査ともに、母体血清マーカー検査と同じく、羊水検査を受けるかどうか、医療者から尋ねられなかったと答えた人が多い。

図C-5 医療機関 羊水検査について医療者からの質問



n=141、ただし、無回答15を除く

図C-5 保育園 羊水検査について医療者からの質問



n=343、ただし、無回答35を除く

羊水検査3 医療者からの「検査を受けるかどうか」についての質問 ①時期

羊水検査を受けるかどうか、医療者から「尋ねられた」と回答した人に、「それはいつ頃のことですか。」と時期を尋ねた。「初診時」「妊娠が確定したとき」「超音波検査でさらに検査が必要だと言われたとき」「その他」の4つの選択肢から選び、妊娠何週頃かについても尋ねた。

- 医療機関調査では尋ねられたと回答した24名全員の回答があった。「妊娠が確定したとき」が13名(54.2%)と最も多く、続いて「初診時」は9名(37.5%)、「超音波検査でさらに検査が必要だと言われたとき」が若干名、「その他」が若干名であった。検査について尋ねられた時期は、18名の回答があり、範囲は5～15週であった。
- 保育園調査では、尋ねられたと回答した70名のうち、無回答の20名を除く50名の回答があった。「妊娠が確定したとき」が24名(48.0%)と最も多く、続いて「初診時」は7名(14.0%)だった。「超音波検査でさらに検査が必要だと言われたとき」が数名だった。また、「その他」が15名(30.0%)であった。検査について尋ねられた時期は、24名の回答があり、うち22名が具体的な妊娠週数を回答しており、範囲は5～15週であった。
- なお、「その他」の記述の内容としては、医療機関調査、保育園調査ともに「覚えていない」または「わからない」と、「妊娠初期」などの回答があった。
- 医療機関調査と保育園調査ともに、妊娠が確定したときに検査を受けるかどうか尋ねられた人が多く、母体血清マーカーと同様の結果となった。

羊水検査4 検査を受けましたか

「羊水検査を受けましたか」という質問に、「はい」「いいえ」で回答してもらった。

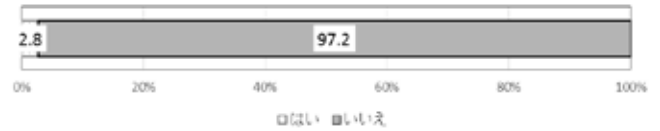
医療機関調査では、回答のあった142名のうち、「はい」は4名(2.8%)、「いいえ」が138名(97.2%)であった。

保育園調査では、記入のあった346名のうち、「はい」は24名(6.9%)、「いいえ」が322名(93.1%)であった。

羊水検査は医療機関調査、保育園調査ともに母体血清マーカー検査を受けた人よりも少なかった。

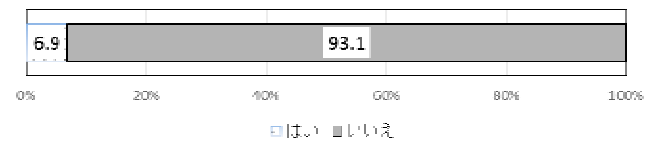
※検査を受けたか否かについての結果は、少数であってもこの調査には必要であると判断して、4名以下の場合も示した。

図C-6 医療機関 羊水検査 受検の有無



n=142、ただし、無回答14をのぞく

図C-6 保育園 羊水検査 受検の有無



n=346、ただし、無回答32をのぞく

羊水検査5 受けた/受けなかった理由【医療機関】

「羊水検査を受けた理由、または受けなかった理由を教えてください」と記述で回答してもらった。

- 医療機関調査では113名の記述があった。そのうち、羊水検査を受けたと回答した人は4名、受けなかったと回答した人は109名だった。
- 羊水検査を受けた理由としては、「クワトロテストで陽性だった」、「心配だったから」「妊娠期間を安心もしくは準備をして心の整理をつけておきたかった」などがあげられる。検査による流産や、胎児の障がいがあった後の中絶を「受け止められる」と記述した人もいた。
- 羊水検査を受けなかった人の理由としては「必要と思わなかった」が多かったが、流産の可能性、どちらにしても産むから必要ない、と記入した人も多かった。その他に、医師が検査について何も言わなかった/勧められなかった、という回答も少なからずあった。
- 「必要と思わなかった」と考える根拠として、医師が何も言わなかったことを挙げる人もおり(「医療者から説明がなかったため必要ないと思った」など)、必要ないという判断に対する医師の影響も大きいと思われる。
- その他に「クワトロテストで異常がなかった」、「超音波で問題がなかった」などスクリーニング検査の結果を挙げる人、「高齢でない」など年齢に言及する人もいた。他には検査について「知らなかった」、「結果を知って不安になりたくない」、「費用が高い」などの理由も複数挙がっていた。

※検査を受けたか否かについての結果は、少数であってもこの調査には必要であると判断して、4名以下の場合も示した。

羊水検査5 受けた/受けなかった理由【保育園】

「羊水検査を受けた理由または受けなかった理由を教えてください」と記述で回答してもらった。

- 保育園調査では286名が記述していた。そのうち羊水検査を受けたと回答した人は19名、受けなかったと回答した人は267名であった。
- 羊水検査を受けた理由としては、「高齢妊娠だから」など、年齢に関わる記述が多かったが、障がいをもった子どもを出産した経験があったり、病気を持っていることがわかっている胎児に他の病気がないか調べるための受検、その他NT検査でリスクが高いという結果が出た人も複数いた。
- 検査を受けない理由としては、医療機関調査と同様に「必要と思わなかった」が多く、その根拠としてクアトロテストを含む母体血清マーカー検査、NTを含む超音波検査で異常が指摘されなかったことを記述した人たちがいた。検査について医師から説明されなかったために、「自分には必要ない」と解釈して記入していた人が複数いた。これは医療機関調査の結果と同様である。
- 検査による流産の危険性があるために受けなかったという理由も多くみられた。また「受けて、結果が悪かった場合、どうすればいいかわからなくなってしまうため」など、中絶を安易に選択したくないという気持ちが垣間みられた。検査について「知らなかった」と書いた人たちも複数いたが、「知らない。病院からは必要な情報しか与えられなかったの、それ以外はできる限り気にしない様にしていた。知れば知る程色々な不安がつのるため」と中には知らなかったことを肯定的に捉えた記述もあった。

羊水検査6 受けるか受けないかを誰が決めたか【医療機関】

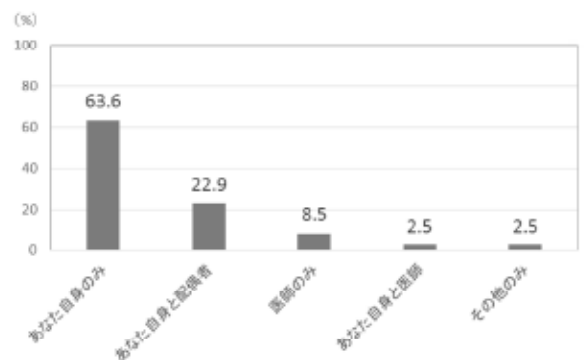
「羊水検査を受けるか、受けないかを誰が決めましたか」と尋ね、「あなた自身」「配偶者」「医師」「その他(具体的に)」の4つの選択肢で、あてはまるものすべてに選択してもらった。

回答の組み合わせをみると、医療機関調査では、回答のあった118名のうち、75名(63.6%)が「あなた自身」のみで決めたと回答し、続いて「あなた自身」と「配偶者」が27名(22.9%)、「医師」のみが10名(8.5%)、「あなた自身」と「医師」の両方を選択した人が若干名、「その他」のみが若干名であった。

母体血清マーカー検査と同様、「あなた自身」が決めたという回答が最も多かった。

ただし、この質問に対しては、無回答が多かった。検査を受けた人たちは全員誰が決めたかを回答していたが、検査を受けなかった人の中には、受けるか否かの判断をする機会がなかった人も含まれるため、無回答が多くなったと考えられる。

図C-7 医療機関 羊水検査 誰が決めたか



n=118、ただし、無回答38をのぞく

羊水検査6 受けるか受けないかを誰が決めたか【保育園】

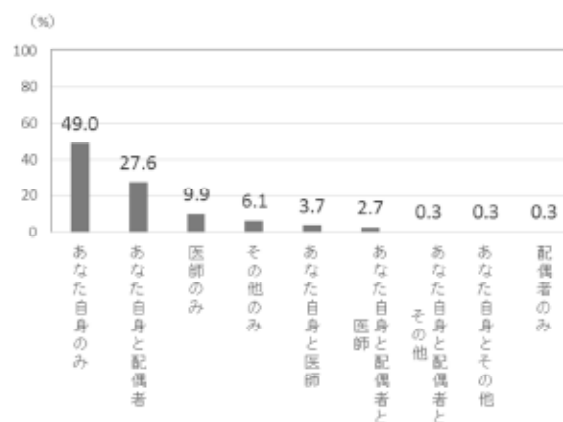
「羊水検査を受けるか、受けないかを誰が決めましたか」と尋ね、「あなた自身」「配偶者」「医師」「その他(具体的に)」の4つの選択肢で、あてはまるものすべてに選択してもらった。

回答の組み合わせをみると、保育園調査では、回答のあった294名のうち、144名(49.0%)が「あなた自身」のみで決めたと回答し、続いて「あなた自身」と「配偶者」が81名(27.6%)、「医師」のみが29名(9.9%)、「あなた自身」と「医師」が11名(3.7%)、「あなた自身」と「配偶者」と「医師」が8名(2.7%)であった。「あなた自身」と「配偶者」と「その他」、「あなた自身」と「その他」、「配偶者」のみがわずかずつあった。「その他」のみは18名(6.1%)であった。

母体血清マーカー検査と同様、「あなた自身」が決めたという回答が最も多かった。

ただし、この質問に対しては、無回答が多かった。検査を受けた人たちは全員誰が決めたかを回答していたが、検査を受けなかった人の中には、受けるか否かの判断をする機会がなかった人も含まれるため、無回答が多くなったと考えられる。

図C-7 保育園 羊水検査 誰が決めたか



n=294、ただし、無回答84をのぞく

羊水検査7 検査による異常の発見

「羊水検査によって何らかの異常が発見されましたか」と尋ね、「はい」「いいえ」「その他(具体的に)」の3つの選択肢から回答してもらった。

- ・ 異常が発見された場合は、さらに付問①「結果を聞いたのは妊娠何週ごろですか」、②「結果は誰と聞きましたか」(具体的に もしくは、「ひとりで」を選択)、③「そのときにどのように感じましたか」、④「その後どうされましたか」、⑤結果を誰に知らせましたか(選択肢)を回答してもらった。
- ・ 医療機関調査では、羊水検査を受けた4名全員が、異常の発見について「いいえ」(異常の発見なし)と答えた。
- ・ 保育園調査では、羊水検査を受けた人は24名であり、すべての人が、異常の発見について「いいえ」(異常の発見なし)と答えていた。
- ・ そのため、付問①～⑤はすべて非該当となる。

羊水検査8 検査についての気持ちや考え【医療機関】

(回答者全員に対して)「羊水検査についてあなたのお気持ちやお考えを聞かせてください」と尋ね、記述で回答してもらった。

- 医療機関では83名の記述があった。記述には、羊水検査に対して積極的・肯定的な評価と消極的・否定的な評価があったが、その両方を書いている人もいた。ここからも、この検査に対する気持ちや考えの複雑さが垣間みられた。積極的・肯定的な評価としては「検査によって事前に病気等が分かればありがたい」、「やはり自分には障がい児を育てる自信がないので」などがあった。「受けたい人が受ければいい」といった、個人の選択であることを強調する記述もあった。
- 消極的・否定的な評価は実に多様であった。最も多く言及されていたのは「事前に赤ちゃんの状態を知っておろすかおろさないかを選択する為の検査なら必要ないと思う」など、中絶を前提とする検査への抵抗感であった。この他、「リスクをおかしてまで受ける程心配ではなかった」など副作用である流産に対する否定的な記述も多くみられた。「リスクがある妊娠なら考えたかもしれない」といった消極的だが条件付で検査を受け入れる可能性を示した記述もあった。
- 他には、費用、穿刺への恐怖、「検査の結果何か異常が見つかるのがこわい」「医師の説明は検査の方法や結果のみで、その結果を背負って生きていく人生は視野にない様と感じた」など検査結果とその後の選択についての不安なども記述されていた。

羊水検査8 検査についての気持ちや考え【保育園】

(回答者全員に対して)「羊水検査についてあなたのお気持ちやお考えを聞かせてください」という質問し、記述で回答を求めた。

- 保育園調査では226名の記述があった。医療機関と同様に記述には、積極的・肯定的な評価と消極的・否定的な評価が含まれ、一人がその両方を書いている人もいた。また、「難しい問題だと思う。個々それぞれの考え方で行えば良い。推奨もしないし否定もしない」など、個人の選択に任されるべきだという内容も多くあった。
- 検査で胎児の障がいを知ることに対しては肯定的に評価する人々も少なくなかった。その中では検査の結果、中絶を視野に入れている人々もいた。検査を「心の準備」として評価する記述もあった。「高齢なら」「心配なことがあれば」「医師から必要とされたら」など特定の条件を挙げた上で「受けてもよい」「受けるかもしれない」と記述した人も複数いた。
- 消極的・否定的な評価の内容も医療機関と同様の傾向がみられたが、「100%確かとは言えない」など母体血清マーカー検査と混同しているとみられる人々もいた。胎児の障がいの有無によって中絶を考えることに対する忌避感や抵抗感が示される一方で、「異常が見つかって、どうするのか決められない」など結果を受け止めることに対する困難や、「自分が妊娠していた時は該当しないと思っていたので深くは考えていなかったが、もし受けるかどうかを自分で判断できるとなると、正直迷うと思う」といった記述もあった。

D その他の検査に関する経験

その他の検査1 その他の出生前検査を受けましたか

「超音波検査、母体血清マーカー検査、羊水検査以外の出生前検査を受けましたか」と尋ね、「はい」「いいえ」で回答してもらった。

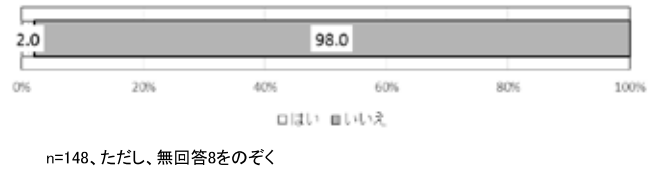
医療機関調査では、回答のあった148名のうち、「はい」は3名(2.0%)、「いいえ」が145名(98.0%)であった。

保育園調査では、回答のあった353名のうち、「はい」は8名(2.3%)、「いいえ」が345名(97.7%)であった。

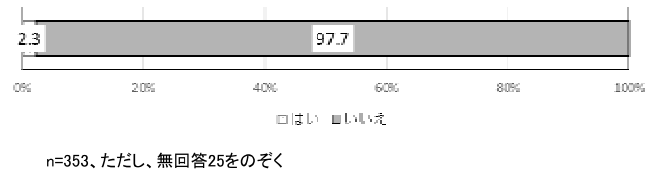
大多数の人は、その他の出生前検査を受けていなかった。

※検査を受けたか否かについての結果は、少数であってもこの調査には必要であると判断して、4名以下の場合も示した。

図D-1 医療機関 その他の検査 受検の有無



図D-1 保育園 その他の検査 受検の有無



その他の検査1 その他の出生前検査を受けましたか

①どのような検査でしたか

その他の出生前検査を受けたと回答した人に、「それはどのような検査でしたか」という質問に、「絨毛検査」「着床前検査」「妊婦の血液中にある胎児細胞検査(胎児の細胞や遺伝子、DNAの検査)[新型出生前検査]」「その他(具体的に)」の4つの選択肢からあてはまるものをすべて選択してもらった。

- 医療機関調査では、回答があったのは2名だった。その選択は、ともに「その他(具体的に)」であった。
- 保育園調査では、その他の検査を受けたと回答した8名のうち、記入があったのは5名で、「絨毛検査」、「着床前検査」、「新型出生前検査」、「その他(具体的に)」が含まれていた。
- 医療機関調査でも保育園調査でも、「その他(具体的に)」を選択し、自由記述があった回答の内容は、妊婦健診等で、ほとんどの妊婦が受ける検査(HIVなど)や、特定妊婦に追加で行われる検査(トキソプラズマや、50GCT、GDMなど)、出生後の検査と思われる検査(先天性代謝異常など)であった。

※どんな検査を受けたかの結果は、少数であってもこの調査には必要であると判断して、4名以下の場合も示した。

その他の検査1 ②その他の検査を受けた理由 ③その他の検査についての気持ちや考え

「その他の検査」を受けたと回答した人に、さらに、付問2「その検査を受けた理由を教えてください」と自由記述で回答してもらった。さらに、付問3「その検査についてあなたのお気持ちやお考えを聞かせてください」と自由記述で回答してもらった。

- 医療機関調査では、付問2、付問3ともに妊婦健診で実施する通常の検査を受けた人たちが答えていたので、この質問には該当しない。
- 保育園調査では、付問2「その他の出生前検査を受けた理由」については、「胎児の先天性の病気がわかるので」「高齢のため」などの記述があった。
- 同じく保育園調査では、付問3「検査を受けた気持ちや考え」については、「安心した」、「今回は異常なしだったので、安心する事ができた」、「陽性だったらどうなんだろう、どうなってしまうんだらうという不安」、「たぶん陽性である確率がひくいと思っていたから受けたんだと思う」、「結果が出て異常なしとわかるまで不安でした」などの記述があった。

受けた出生前検査の組み合わせ

それぞれの人が受けたと回答した出生前検査の組み合わせを集計したところ、組み合わせのパターンは次に示すように全体で10種類あった。

- ①超音波検査のみ、②超音波検査とNT検査、③超音波検査と母体血清マーカー検査、④超音波検査と羊水検査、⑤超音波検査とNT検査と母体血清マーカー検査、⑥超音波検査とNT検査と羊水検査、⑦超音波検査と母体血清マーカー検査と羊水検査、⑧超音波検査と絨毛検査と羊水検査、⑨超音波検査とNT検査と母体血清マーカー検査と羊水検査、⑩超音波検査とNT検査と新型出生前検査と母体血清マーカー検査と羊水検査
- この中で検査を受けた割合が高かったのは、①超音波のみだった。これが、医療機関調査と保育園調査のいずれでも、およそ7割～8割を占めた。それ以外はすべて1割未満であった。その中では、②超音波検査とNT検査および③超音波検査と母体血清マーカー検査が数パーセントあった。それに加えて保育園調査では④超音波検査と羊水検査の組み合わせも数パーセントあった。この組み合わせは、「高齢妊娠」とされる人たちに多く、超音波以外の他の安全だが精度が低い検査は受けずに羊水検査を受けた人たちであった。
- いくつかの検査を重ねて受けた人たちの理由として記述されたのは、「上の子に障害があった」「流産をくり返した」や、「高齢のため不安だった」「医師から障害がある可能性を指摘された(結果としてなかった)」などだったが、いくつかの検査を受けた詳細な理由、1カ所の医療機関で受けたのか複数の医療機関で受けたのかなどの詳細はわからなかった。

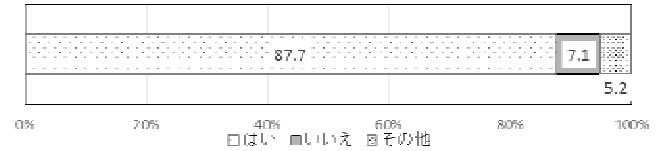
E 胎児の性別

胎児の性別1 性別を知ることの希望と実際

「胎児の性別を知ること(妊娠中に)希望していましたか」という質問に、「はい」「いいえ」「その他(具体的に)」の選択肢で回答してもらった。

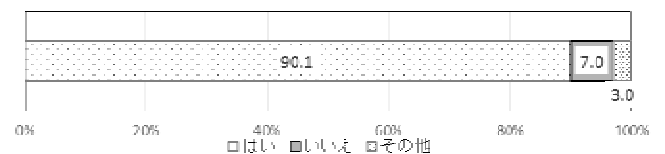
「はい」と答えた人、つまり、性別を知ることが希望していたと答えた人は、医療機関調査では87.7%(136名)、保育園調査では90.1%(355名)といずれもほぼ9割にのぼった。胎児の性別への関心が高いことを示している。しかしながら、「いいえ」と答えた人、つまり、性別を知ることが希望していなかった人も医療機関調査では7.1%(11名)、保育園調査では7.0%(26名)いた。

図E-1 医療機関 性別の希望



n=155、ただし無回答1を除く

図E-1 保育園 性別の希望



n=369、ただし無回答9をのぞく

胎児の性別2 性別がわかったか、その方法

「医療者から性別を伝えられましたか」という質問に、性別を「伝えられた」と回答した人(「聞いたら、伝えられた」と回答した人も含む)は、医療機関調査では85.8%(133名)、保育園調査では93.2%(344名)、「伝えられなかった」と回答した人は、医療機関調査では8.4%(13名)、保育園調査では3.8%(14名)であった。「その他」には、妊娠継続中の人から、「現時点ではわからない」等の回答があった。

さらに、「性別は妊娠中にわかりましたか」と質問し、「わかった」「わからなかった」「その他(具体的に)」の3つの選択肢から回答してもらった。そして、「わかった」という人には、「どういった方法でわかりましたか」という質問をして、「超音波検査」「羊水検査」「着床前検査」「その他(具体的に)」の選択肢で回答してもらった。

- 妊娠中に性別が「わかった」と回答した人は、医療機関調査では87.7%(136名)、保育園調査では93.8%(346名)、「わからない」と回答した人は医療機関調査では7.7%(12名)、保育園調査では4.3%(16名)であった。
- なお、回答している直近の妊娠では、妊娠中の人が含まれていたため、「出産」した人だけに限って集計したところ、「わかった」と回答した人は、医療機関調査では91.9%(57名)、保育園調査では93.8%(319名)であった。
- 性別を知った方法について尋ねたところ、超音波検査(エコー)で知った人が、医療機関調査では97.8%(132名)、保育園調査では98.3%(346名)であった。

胎児の性別3 自由回答(1)

「胎児の性別を知りたい理由、知りたくない理由など、胎児の性別を知ることについて自由にお書きください」と自由記述で回答してもらった。

- 医療機関調査では156名のうち140名(89.7%)、保育園調査では378名のうち326人(86.2%)が記入していた。この質問に対する記入率は他の自由記述欄に比べて非常に高く、関心の高さが伺えた。
- 性別を知りたい理由としては、医療機関調査と保育園調査ともにおよそ半数の人が「準備」という言葉を使っていた。「出産の準備のため」、「名前の準備のため」、「衣類の準備等、子どもの物品の準備」、「準備に時間をかけたい、ゆとりを持ちたい」などがあった。準備という単語を使っていない人でも、「洋服を買いたかった」「名前を考えたかった」など「準備」と同内容の記述があった。
- それ以外に、「たんに楽しみ」などの「楽しみ」という言葉も多かった。他に「胎児に呼びかけができる」、「具体的にイメージできる」、「愛情が深くなる」、「心構えとして」という記述があった。性別を知って、それが希望通りならば楽しみが増し、希望と違っていただければ生まれてくるまでに受け入れる、という内容の記述が目立った。「周囲からの質問に答えるため」という回答もいくつかあった。また、とくに希望の性別はなく、性別はどちらでも良かったけれども知りたかったという記述も少なくなかった。

胎児の性別3 自由回答(2)

- 一方、性別を知りたくない理由の多くは、「性別はどちらでもよいと思っていたので、知る必要はない」、「産まれるまでの楽しみにしたい」であった。
- 「無事に(元気に)産まれてくれればどちらでもよい」も多くあげられていたが、医療機関調査で目立った。これは妊娠中の人の方が比較的多かったことが影響するのかも知れない。なお、「(男女)どちらでもよいと思っていたが、医師はしらせてがっていた」、「(希望していなかったが)エコーでわかってしまった」など医師との関係についての記述もあった。
- 胎児の性別による中絶はあってはならない、知るか知らないかは妊婦の自由、授かったことを受け入れたい、といった内容の記述もいくつかあった。

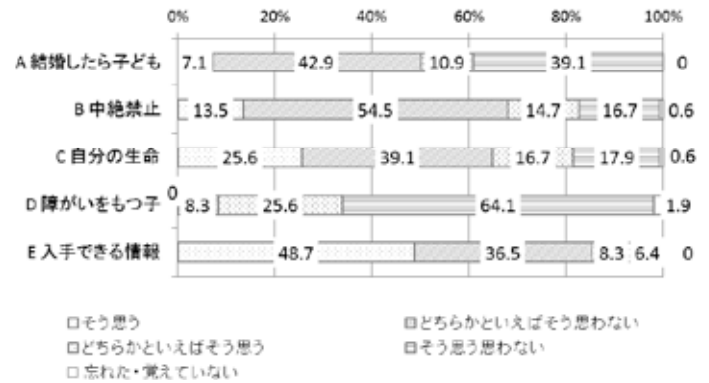
F 妊娠・出産についての意見

妊娠・出産についての意見【医療機関】

「妊娠・出産についてあなたの意見をお聞かせください」という質問に、以下の5つの事項について、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」の4つの選択肢から1つずつ選択してもらった。

「A 結婚したら子どもを持つのは当たり前」は、肯定と否定がほぼ半数であった。「B 中絶をしてはいけない」は、（そう思う＋どちらかと言えばそう思う、の合計で）肯定が6割であった。「C 子どもをもてば自分の死後も自分の生命がつながっていく」は、6割が肯定していた。「D 障がいをもつ子を産むことは社会の不利益につながる」は、約9割が否定していた。「E 入手できる情報はできる限り知っておきたい」は、約8割が肯定していた。

図F-1 医療機関 妊娠・出産についての意見



妊娠・出産についての意見【保育園】

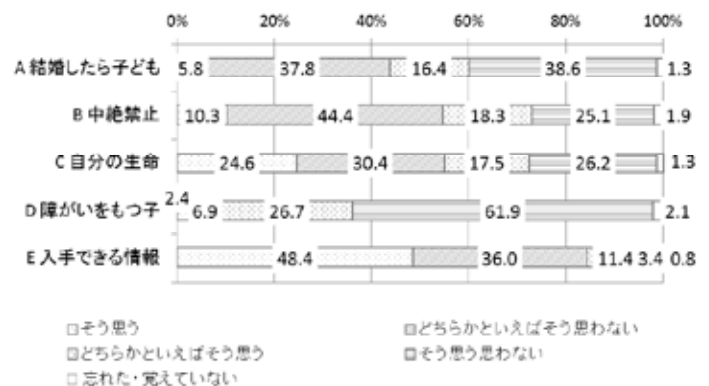
「妊娠・出産についてあなたの意見をお聞かせください」という質問に、以下の5つの事項について、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」の4つの選択肢から1つずつ選択してもらった。

「A 結婚したら子どもを持つのは当たり前」は、ほぼ半数だが、否定がやや多い。「B 中絶をしてはいけない」は、肯定と否定がほぼ半数となっている。「C 子どもをもてば自分の死後も自分の生命がつながっていく」は、6割近くが肯定していた。「D 障がいをもつ子を産むことは社会の不利益につながる」は、約9割が否定していた。「E 入手できる情報はできる限り知っておきたい」では、約8割が肯定していた。

医療機関調査と保育園調査とは、同じような傾向であったが、「A 結婚したら子どもを持つのは当たり前」では、保育園調査の方がやや否定が多かった。また保育園調査の方が「中絶をしてはいけない」に同意した割合がやや高かった。この差については年齢や学歴、就業の有無との関連を検討したい。

妊娠経験や出生前検査の経験に、意識が影響しているかについても今後検討する。

図F-1 保育園 妊娠・出産についての意見



情報収集のためのサイトや雑誌名

「妊娠・出産についての情報収集のためによく見た(妊婦向けの)サイトや雑誌名を教えてください。(正確にわからない場合は、キーワードなどでも結構です)」と尋ね、記述式で回答してもらった。

- 医療機関調査では、156名のうち32名が無回答、または「特になし」と回答した。記述のあった124名の内容は、「たまごクラブ/ひよこクラブ」が約50件、その略称である「たまひよ」が約20件、両方を合わせると約70件と多かった(雑誌かwebサイトかの区分はしていない)。webサイト上の口コミサイト「ウィメンズパーク」も約30件あった。これらはすべて、ベネッセコーポレーションが出版・運営している。「ベネッセ」と会社名だけの記入も散見された。
- その他には「Premo」や、「妊すぐ」「赤すぐ」などの記述があった。これらは、雑誌とwebサイトがあるが、これらのどちらを見ているか、特定できる記述とそうでない記述があった。また、雑誌やサイトを特定せずに、時期や関心に応じて検索してヒットしたところを見ていくという回答も10件ほどあった。
- 保育園調査では、378名のうち75名が無回答、または「特になし」と回答した。記述のあった303名の内容は、「たまごクラブ/ひよこクラブ」140件程度、「たまひよ」約90件、「ウィメンズパーク」約60件となっており、医療機関調査と同じくベネッセ関連の雑誌やサイトが多くの人に利用されている。また、『はじめての妊娠・出産』等の書籍なども挙げられていた。
- 多くの回答者が、雑誌やサイト名のみを記述しているが、中には雑誌やインターネットの情報を見ないわけではないが、妊娠出産の経験者や友人等の話(口コミ)をより重視しているという意見もあった。これらの傾向がどのように変化しているのかについては、今後、詳細に検討したい。

医療者や病院・医療のシステムについての意見【2つの調査の共通点】

最後に、「あなたの妊娠などのご経験から、医療者や病院・医療のシステムなどについてご意見、ご感想があればお聞かせください」と自由記述で回答してもらった。

- 医療機関調査では、81名からの回答があった。うち「特になし」などの回答を除いた75名からの回答を検討した。保育園調査では、216名からの回答があった。うち「特になし」などの回答を除いた208名からの回答を検討した。
- 医療機関調査、保育園調査に共通して、記述された内容を分類すると、医療者(医師、助産師、看護師、医療スタッフなど)の対応についての言及、医療施設(病院、産院、助産所など)の記述が最も多く、質問に対応した回答がなされていた。
- 医療施設について記述された内容としては、医療施設の選び方、近所に出産できる医療施設が少ないこと、そのために予約を妊娠初期にしなければならなかったことなどが多かった。出産方法の希望と実際の出産経験(良かったこと、良くなかったことの両方)についての記述も少なくなかった。医療費についてや、妊婦健診や出産時に上の子どもを連れていける・預けることのできる場所についての要望もあった。母乳育児の指導やマッサージをしてくれるところが欲しい、家族立会での出産がしたいなどの要望があったことも、共通していた。
- 医療者の対応について記述された内容としては、医療情報とその説明不足に対する要望、妊娠中や出産時の不安の内容とその対応への要望などが多かった。ただし、医療者や医療施設の対応によって安心したこととそれへの感謝についての記述も少なくなかった。
- 医療者や医療施設、医療システムについての「情報」と「説明」に関する記述も多くあった。そのうち、妊産婦が求めている情報の質や、医療者からの情報提供はあったがその説明が不十分であるという内容が、詳細に記述されていた回答がいくつかあった。また、情報だけではなく、医療者に「質問ができる雰囲気してほしい」、「相談したい」、「話を聞いてほしい」といった要望もいくつか記入されていた。

医療者や病院・医療のシステムについての意見【2つの調査の相違点】

- 医療機関調査と保育園調査を比較すると、つぎのような違いがみられた。
- 医療機関調査では、医療施設の規模や形態（大学病院、総合病院、病院、産院、助産院など）について記述した回答の件数が多い傾向にあったが、保育園調査では、医療施設の規模や形態よりも、医療者（医師、助産師、看護師、医療スタッフなど）について記述した回答の件数が多い傾向にあった。
- 医療機関調査の回答の方が、医療機関の選び方、出産の形態についてのこだわり（自然出産、より自然に近い出産など）、妊娠・出産に関わる医療技術の進歩について慎重・懐疑的な回答が多い傾向にあった。これは医療機関調査において質問紙の配布に協力いただいた施設を選んだ人たちの傾向が反映していると推察できる。
- 出生前検査についての記述では、医療機関調査よりも保育園調査の方が「出生前検査」や「高齢妊娠／高齢出産」、「子どもの障害・疾患・異常」、「不妊治療」等に言及していた回答が多かった。これは、回答者の妊娠年齢や回答時の年齢の違いが影響していると推察できる。

結果のまとめ

最後に、本調査の結果から明らかになったことのまとめと、10年前のアンケート調査結果（全体の調査研究は2002-2005年）との比較について、いくつか指摘しておく。なお、10年前の調査結果の詳細については、柘植・菅野・石黒著『妊娠—あなたの妊娠と出生前検査についておしえてください』（2009年、洛北出版刊）を参照いただきたい。ただ、今回の調査は、10年前の調査とは、医療機関調査の配布先が異なっていること、保育園調査の12園のうち8園は10年前と同じ配布先だが、どの施設で配布されて回収されたものかはわからないことなどから、10年前の調査結果との比較において、結果の違いが実施年による違いとは言い切れないことに注意いただきたい。

妊娠経験について

まず、直近での妊娠時の年齢を直接尋ねたところ、医療機関調査では32.2歳、保育園調査では33.2歳であった。10年前の調査（有効回答375名）では、すべての妊娠年齢の平均が30.4歳であった。ただし、このすべての妊娠年齢は、子どもが複数いる際には上の子どもの妊娠時の年齢が含まれているので、直近の妊娠時の年齢に限定すると30.4歳よりも高くなると予想される。ちなみに、回答時の子どもの平均人数は1.7人、その平均年齢が3.5歳だった。

一人の女性の妊娠回数は、医療機関調査では平均1.8回、保育園調査では平均2.1回であった。10年前の調査では2.0回であった。10年前の調査では調査時から過去10年間に限って尋ねたので、厳密な比較はできないが、妊娠回数については今回の調査とは大きな差はない、といえる。

「妊娠していると感じた時」については、質問が10年前の調査とは若干違っているために厳密な比較はできないが、今回の調査結果では、医療機関、保育園の両調査ともに、「市販の妊娠検査薬で」を選択した人がもっとも多かった。医療機関調査が75%、保育園調査が67%であった。その次が「月経が止まって」を選択した人で、医療機関調査が55%、保育園調査が54%を占めた。複数回答のため、両方を選択した人たちも少なくなかった。10年前の調査結果では、「市販の妊娠検査薬で」が69%、「月経が止まって」が64%で2つの選択肢の間には今回の結果ほどには差がなかった。今後の動向に着目していきたい。

「胎児の存在を感じた時」についても、質問が10年前の調査とは変わったため、比較は難しいが、超音波検査（エコー）で妊娠初期の胎芽や胎児を見たときと、胎動を感じたときについての記述が多い特徴は共通していた。

「妊娠に気づいた時の気持ち」については、10年前の調査結果との顕著な違いはみられなかった。ただ、自由記述において、10年前の調査結果にはみられなかった表現、たとえば「20週るときポコポコと胎動を感じた」「仕事していた時におなかポコポコした」などがいくつか見られた。「ポコポコ」は、インターネット上の妊婦が書き込むサイトなどでも

よく使われていた。

妊娠中の不安への対処

妊娠中に感じる不安と、その不安にいかに対処したのかを、出生前検査への姿勢に関係するのではないかという視点から尋ねた。妊娠中の不安は、自分の健康についての不安と胎児の状態についての不安に分けられるが、そのどちらについても、「不安があった」と答えたのは、医療機関調査、保育園調査ともに 6 割強であった。10 年前の調査結果では、「妊娠について、あるいは生まれてくる子どもについて不安になったことがありますか」とまとめて尋ねたが、「不安があった」と答えたのは、同じく 6 割強であった。

しかし、不安への対処方法では、「妊娠出産に関する本を読んだ」が保育園調査で 4 割程度、医療機関調査では 3 割程度だった。10 年前の調査では「妊娠出産に関する本を読んだ」が 45%で最も多かったので、減少傾向がみてとれる。代わりに「身近な人に相談」「インターネットから情報を得た」が増えた。インターネットからの情報入手は、ここ数年のスマホやタブレット端末の増加に伴って増えたと思われる。「身近な人に相談」についてもスマホから SNS を利用することによって、離れて暮らす身近な人との情報交換（情報交流）が盛んになっていることが背景にあると考えられる。不安の対処方法として「専門家に相談した」を選んだ人は、「自分の心身の状態の不安」では医療機関調査・保育園調査ともに 3 割程度だが、「胎児の状態の不安」では、医療機関調査 4 割、保育園調査 5 割程度だった。10 年前に両方の質問を兼ねる質問への回答が 4 割弱であったことを考えると、下がっているとは言えない。とはいえ、医療機関調査の「胎児の状態の不安」において、「専門家に相談した」40%は、「インターネットから情報を得た」46%、「身近な人に相談した」43%より低く、専門家に相談すると共に、インターネットや身近な人たちからも情報を得る、という多元的な情報収集を行う積極的な妊婦像があらわれた。

出生前検査についての知識

出生前検査についての知識は 10 年間で変化したのだろうか。今回の 2 つの調査では「妊娠に気づいた頃」までに約 2 割の人が、「初めて医療機関に行った頃」までに 6 割弱の人が、出生前検査について調べていたという結果が得られた。ただし、複数の子どもがいる場合でも、ほとんどの人が直近の妊娠について答えたため、以前の妊娠の際に知ったり調べたりした人は、この質問について、すでに「調べた」と回答している可能性が高い。そのため、「調べた」人の割合が大きくなっているのかもしれない。

しかしながら、医療施設に行く前に得ていた情報について具体的に記述していたのは、超音波検査の場合は医療機関調査 19%、保育園調査 16%であり、母体血清マーカー検査の場合は医療機関調査 12%、保育園調査 11%、羊水検査の場合は医療機関調査 27%、保育園調査 34%であり、検査によってばらつきがある。また、ほとんどの人が受けていて一般的に頻繁に実施されている超音波検査よりも、受けた人が少数だった羊水検査についての方が、

事前情報を得ていた人の割合や情報の具体的内容を記述した人の割合が高かった。

出生前検査についての医療者からの説明

医療者からの説明の有無については、超音波検査の場合には、医療機関調査では 29%が口頭で説明されたと答えており、説明資料を渡されたという人も加えると 33%となった。また、受けるかどうか質問された人の割合は 19%だった。保育園調査では説明された人に説明資料を渡されたという人も含めて 25%と 10 年前の調査結果とほぼ同じ水準だった。

医療機関調査の方が説明された人が多いのは、日本産科婦人科学会のガイドラインが、技術の進展にあわせて、2007 年、2011 年、さらに 2013 年に改定された（日本産科婦人科学会 2013 年「出生前に行われる遺伝学的検査および診断に関する見解」参照）ことと関連していると思われる。ガイドラインの改定に伴って、超音波検査が出生前検査・診断に含まれるという姿勢が強まったことが、回答した妊娠の時期が比較的新しい医療機関調査に影響したのではないだろうか。また、このアンケート調査票の配布に協力していただいた医療機関が、超音波検査の説明に留意している施設が多かったことも要因として考えられる。

出生前検査を受けた人の割合と検査結果

母体血清マーカー検査、羊水検査のそれぞれを受けた人の割合は、母体血清マーカー検査が医療機関調査 6%・保育園調査 11%、羊水検査が医療機関調査 3%・保育園調査 7%であった。医療機関調査において検査を受けた人の割合が少ないのは、回答者に妊娠中の人や初産の人が多かったこと、直近の妊娠時の年齢が保育園調査よりも若干若かったことなどが原因として挙げられる。

10 年前の調査結果では、それぞれの出生前検査について「知らない」と答えた人は回答者から除外したため、今回の調査結果と比較することはできない。しかしながら、母数を含めた全数とし、検査を「受けた」と回答した人の割合を再計算すれば、比較は可能である。そのように集計し直したところ、今回の調査における母体血清マーカー検査は医療機関調査 5%、保育園調査 9%、羊水検査が医療機関調査 3%、保育園調査 6%となった。10 年前の調査結果でも、「知らなかった」と回答した人を母数に入れて再集計したところ、母体血清マーカー検査が 12%、羊水検査が 6%であった。今回の調査結果と比較すると、母体血清マーカー検査が減り、羊水検査はわずかに増加した。

母体血清マーカー検査を受けた人で、その結果が「陽性」だったと回答した人は医療機関調査、保育園調査ともにごくわずかだった。羊水検査を受けて「何らかの異常があった」と回答した人はいなかった。いずれも、少人数なので 10 年前の調査結果と比較するのは難しいが、母体血清マーカーの結果についての回答では、その他（「覚えていない」「わからない」「忘れた」）が数名いたこと、「陽性」だったが羊水検査による確定診断はしなかった、と答えた人がいたことは 10 年前と同様である。

超音波検査は医療機関調査でも保育園調査でも受けた人は 99%となった。ほとんどの人

が受けていたことになる。10 年前の調査でも同様の結果であった。今回の調査では、妊娠中に超音波検査を受けた頻度についても尋ねたが、その結果は、医療機関調査、保育園調査ともに「ほぼ毎回」が 6 割を超え、「初期・中期・後期など段階ごとに数回」は 3 割強にとどまった。

超音波検査で「何らかの異常があった」という人の割合も、10 年前の調査結果とは大差がなく、「異常」の内容も、多くは逆子、前置（ぜんち）・低置（ていち）胎盤、胎児の大きさ、羊水量、子宮内の出血などで、大きな変化はなかった。今回の調査では、10 年前の調査では質問しなかった NT 検査について尋ねたところ、受けたと答えた人が医療機関調査 5 名、保育園調査 31 名であり、ともに 1 割以下であった。超音波検査に関する自由記述に NT 検査を受けたと判断できる記述は 10 年前の調査結果でもごく少数見られた。それと比べると、10 年前の調査結果よりも増えていると推察でき、今後の動向が注目される。その一方で、NT 検査については受けたかどうか「わからない」という人が医療機関調査で約 2 割、保育園調査では約 5 割に上っており、「妊婦健診の中でみてもらった」、と自由記述で回答している人も散見されたことから、医療者からの説明や受検の確認などの対応についての課題が指摘できる。

出生前検査をめぐる妊婦の意思決定

出生前検査についての医師からの説明に満足している人が多いことは 10 年前の調査結果と同様である。

出生前検査を受けるか受けないかについては、「自分で決めた」と答えた人が多かったが、その中には、医療者からの情報の提示の仕方や医療者の判断に強く影響されていた人、さらには妊娠年齢、上の子に障害があるかないかなど「医学的な適応基準」（医学的に検査を受けることが適当であるとされる基準、実際に受けるかどうかは本人の選択や同意による）によって決めていた人が少なくなかったことが、自由記述の分析から明らかになった。

妊婦の情報収集におけるチャネルはこの 10 年間をみても多元化していた。さまざまな水準の情報を豊富に持つ妊婦が、医療者とどういった関係を結んでいくのかについては、今後検討していきたい。

以上、10 年前の調査結果を参照しながら、今回の調査結果についてまとめた。今後、インタビュー調査とインターネット調査を実施して、アンケート調査の結果と併せて、さらに深く考察していく。

謝辞

最後に、この調査にご協力いただいた方々に深くお礼を申し上げます。

アンケート調査のプレテストに協力いただいた方、アンケート調査の配布にご協力いただいた医療機関、保育園、子育て支援団体の皆様、そして、アンケート調査に回答いただいた皆様、お忙しい中、本当にありがとうございました。

また、この2つの調査を実施できたのは、次の研究助成によっています。ここに記して謝意を表します。

1) 医療機関調査

2013年度 明治学院大学社会学部附属研究所 一般研究プロジェクト

研究課題：「妊娠と出生前検査に関わる女性の経験と社会の対応についての研究
——都内における質問紙調査」

研究代表者：柘植あづみ

2) 保育園調査

平成25年度～平成27年度 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤（B）

研究課題：「医療技術の選択とジェンダー：妊娠と出生前検査の経験に関する調査」

研究課題番号：25283017

研究代表者 柘植あづみ

妊娠と出生前検査の経験に関するアンケート調査 2013 集計結果報告

妊娠と出生前検査の経験に関する調査研究会(略称 妊娠研究会)

連絡先 〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37

明治学院大学社会学部 柘植研究室 気付

発行日 2014 年 10 月 20 日 (非売品)